

奈良^{ごせ}県御所市

麻^まノ^の谷^{たに}2・3号墳

平成28年(2016年)3月
御所市教育委員会

例 言

- 1 本書は、土砂採取を目的とした工事に伴う事前調査として、株式会社葛建設の委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市戸毛 1091-1 番地（小字 麻谷）に所在する麻ノ谷 2・3 号墳の発掘調査報告書である。
- 2 調査の体制等は次の通りである。

調査主体	御所市教育委員会	調査担当	御所市教育委員会 文化財課技術職員 金澤雄太
調査期間	平成 27 年 4 月 24 日～7 月 22 日	調査面積	830㎡
- 3 現地での写真撮影、および遺物の撮影は金澤が行った。
- 4 本書の編集は金澤が行い、執筆は第 5 章－1 は奥山誠義氏（奈良県立橿原考古学研究所）、第 5 章－2 は金井慎司氏（パリノサーヴェイ株式会社）に執筆いただき、その他を金澤が行った。
- 5 発掘調査には、調査補助員として金光順子、松村朋美の協力が、遺物整理・報告書作成には、金光、松村、津谷晴美の協力があつた。
- 6 本発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、御所市教育委員会文化財課にて保管している。
- 7 現地調査及び本書刊行にかかる費用は、株式会社葛建設がすべて負担した。関係各位にご理解、ご協力いただいたことを記し、深謝いたします。
- 8 土器実測図の断面は、土師器を白抜き、須恵器を黒塗り、瓦器を網掛けとした。
- 9 鉄器実測図の断面は、有機質遺存部を網掛けとした。
- 10 参考文献は、第 5 章に限って各文末に記したが、その他については本文末に一括した。

目 次

例言

第 1 章	位置と周辺の遺跡	1
第 2 章	調査の経過	6
第 3 章	2 号墳の調査成果	8
第 4 章	3 号墳の調査成果	23
第 5 章	自然科学的分析	33
第 6 章	まとめ	38

参考文献

図版

挿図 目次

図1	麻ノ谷古墳群の位置	1
図2	周辺の主要遺跡分布図	3
図3	麻ノ谷古墳群と巨勢谷の古墳（支群構成は楠元編 1982）	5
図4	2・3号墳墳丘測量・断面図	7
図5	2号墳墳丘測量図	9
図6	2号墳墳丘土層断面図	11
図7	2号墳南埋葬平面・立面・土層断面図	13
図8	2号墳北埋葬平面・土層断面図	15
図9	2号墳南埋葬墓坑埋土出土土師器	16
図10	2号墳南埋葬出土鉄器	17
図11	2号墳墳丘出土土器（1）	20
図12	2号墳墳丘出土土器（2）	21
図13	土坑1・2平面・土層断面図、土坑2出土土師皿	23
図14	3号墳墳丘測量図	24
図15	3号墳墳丘土層断面図	25
図16	3号墳北埋葬平面・立面・土層断面図	27
図17	3号墳北埋葬東半鉄器出土状況	28
図18	3号墳南埋葬平面・土層断面図	29
図19	3号墳北埋葬墓坑埋土出土須恵器	30
図20	3号墳北埋葬出土鉄器	31
図21	3号墳南埋葬出土鉄刀子	32
図22	麻ノ谷2号墳北埋葬より出土した赤色顔料の蛍光X線スペクトル	33
図23	骨格各部位の名称および2号墳北埋葬の出土部位	37

挿表 目次

表1	2号墳南埋葬出土鉄鍬法量表	18
表2	2号墳南埋葬出土鉄刀子法量表	18
表3	3号墳北埋葬出土鉄鍬法量表	32
表4	骨同定結果	35
表5	2号墳北埋葬の歯式	36
表6	2号墳北埋葬の歯牙計測値	36

図版 目次

- 図版 1 1 古墳群からの眺望 (南から)
2 同 (北東から)
- 図版 2 1 2号墳掘削前 (南から)
2 同 (南東から)
- 図版 3 1 2号墳全景 (南から)
2 同 (北西から)
- 図版 4 1 2号墳周溝 (西から)
2 同 (東から)
- 図版 5 1 2号墳周溝内炭層検出状況 (南から)
2 2号墳周溝内土層断面 (東から)
- 図版 6 1 2号墳埋葬施設 (西から)
2 2号墳南埋葬 (西から)
- 図版 7 1 2号墳南埋葬 (南から)
2 同横断土層断面 (西から)
- 図版 8 1 2号墳南埋葬縦断土層断面西半 (南から)
2 同東半 (北から)
3 2号墳南埋葬遺物出土状況 (南東から)
4 同 (北西から)
5 2号墳北埋葬 (西から)
- 図版 9 1 2号墳北埋葬 (北から)
2 同横断土層断面 (西から)
- 図版 10 1 2号墳北埋葬縦断土層断面西半 (南から)
2 同東半 (北から)
3 2号墳南埋葬墓坑埋土出土須恵器
4 同出土土師器
- 図版 11 1 2号墳南埋葬出土鉄鏃
2 同出土農工具
- 図版 12 2号墳墳丘出土土器 (1)
- 図版 13 2号墳墳丘出土土器 (2)

- 図版 14 1 2号墳墳丘出土土器(3)
2 2号墳南埋葬出土鉄器3繊維質細部
3 同4口巻細部
4 同5繊維質細部
5 2号墳墳丘出土須恵器1口縁端部外面
- 図版 15 1 2号墳墳丘出土須恵器1内面当て具痕
2 同2内面静止ナデ
3 同4外面ヘラ記号
4 土坑1(東から)
5 同土層断面(東から)
6 土坑2(北から)
7 同土層断面(南東から)
8 土坑2出土土師器
- 図版 16 1 3号墳掘削前(南から)
2 3号墳全景(南から)
- 図版 17 1 3号墳周溝(北西から)
2 3号墳周溝内土層断面(東から)
- 図版 18 1 3号墳埋葬施設(西から)
2 3号墳北埋葬(西から)
- 図版 19 1 3号墳北埋葬(北から)
2 同横断土層断面(西から)
- 図版 20 1 3号墳北埋葬縦断土層断面西半(南から)
2 同東半(北から)
3 3号墳北埋葬墓坑埋土遺物出土状況(東から)
4 3号墳北埋葬遺物出土状況(北西から)
5 同細部(北西から)
- 図版 21 1 3号墳南埋葬(西から)
2 同(南から)
- 図版 22 1 3号墳南埋葬横断土層断面(東から)
2 3号墳南埋葬縦断土層断面西半(南から)
3 同東半(北から)
4 3号墳南埋葬遺物出土状況(南西から)

- 図版 23 1 3号墳北埋葬墓坑埋土出土須恵器
2 3号墳北埋葬出土鉄器
- 図版 24 1 3号墳北埋葬出土鉄器 2 繊維質細部
2 同 3 口巻細部
3 3号墳南埋葬出土鉄刀子
4 顔料の小塊（目盛間隔は 0.5mm）
5 4 の拡大
6 顔料の SEM 画像（枠は元素分析範囲）
7 顔料の SEM 画像（6 中央拡大）
- 図版 25 麻ノ谷 2・3号墳出土人骨

第1章 位置と周辺の遺跡

1 位置 (図1)

御所市は奈良県の中部に位置する面積 60.58km² の都市であり、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町に接している。市域の北部は低平な奈良盆地の西南端に位置し、西部には金剛・葛城山がそびえ、南東部には竜門山地西端にあたる巨勢山などの丘陵に跨る。地形的には、市の南に中央構造線がはしる、内帯と外帯の接する地域といえ、自然景のみならず人々の生活や風習等において奈良盆地と吉野山地との漸移・連結地帯をなしている。また、盆地各所への利便性もさることながら、西は金剛・葛城山の間にある水越峠を通じて大阪方面へつながり、南は風の森峠を越えて五條・吉野・和歌山方面へ至る、交通の結節地としても重要な役割を果たしている。

今回調査を行った麻ノ谷古墳群は、北流する曾我川によって形成された巨勢谷の中に位置しており、曾我川の右岸、南東から伸びる尾根上に築かれている。また、奈良盆地から大口峠を越えて巨勢谷に入ってくる地点を見下ろす立地といえる。



図1 麻ノ谷古墳群の位置

2 周辺の遺跡 (図2)

御所市域では旧石器時代の遺跡は現状で確認されておらず、縄文時代になって初めて人類の痕跡を見出すことができる。明確な遺構が確認されている遺跡はそれほど多くないが、観音寺本馬遺跡において後期の竪穴式住居や土壙墓、晩期の平地式住居や水場遺構、土器棺墓群 (本村 2009、岡田編 2013、木許・西村編 2015)、玉手遺跡において晩期の平地式住居や土器棺墓群が検出されており (御所市教育委員会 2010)、近接する橿原市曲川遺跡なども含めて具体的な集落の様相について議論できる下地が整ってきている。またこれら遺跡では、前者で半裁柱、後者で漆塗糸玉といった北陸地域でみられる遺構・遺物が多く確認されており、当時の交流の一端が窺われる。加えて、伏見遺跡では中期末～後期中葉 (廣岡・十文字 2005)、南郷遺跡地藏谷地区では中期末～後期初頭の土器が多く出土しており (坂編 2000)、付近に集落の存在が想定できる。縄文時代の遺物の出土は山麓部を中心に比較的多く認められ、後期～晩期のものが多い中で前期に遡るものも少数ではあるが玉手遺跡などで確認されている (松田 1997)。

弥生時代の代表的な遺跡には鴨都波遺跡があり、遺構や遺物の豊富さから弥生時代を通じて営まれた拠点的大集落と考えられる (木許編 1992、藤田・尼子編 1992 ほか)。高地性集落では、巨

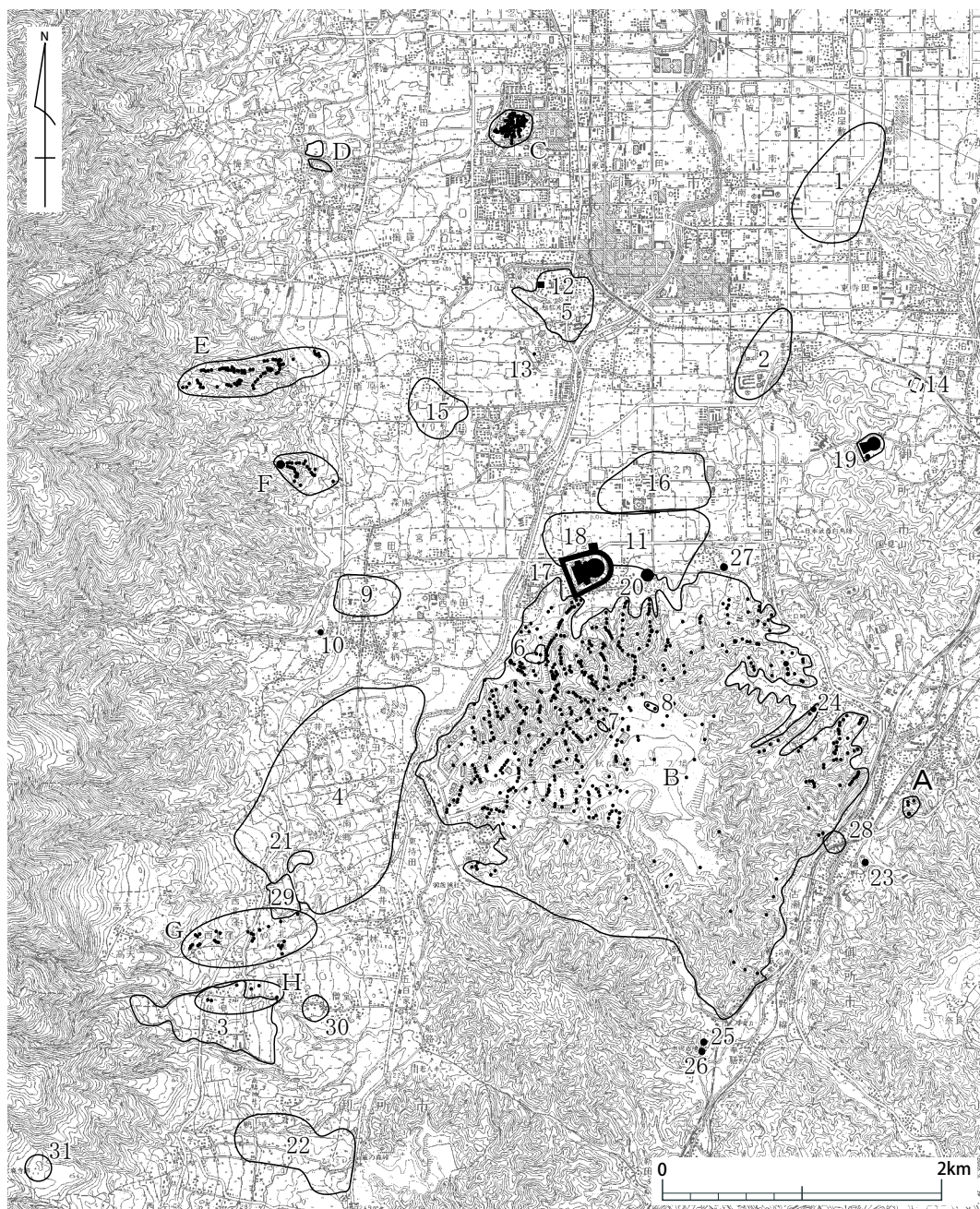
勢山丘陵上に巨勢山境谷遺跡（藤田編 1985、木許編 2007 ほか）、巨勢山中谷遺跡（御所市教育委員会 1989）、巨勢山八伏遺跡（御所市教育委員会 1990）などが後期になって営まれることが知られている。また、名柄遺跡よりやや南西のところでは外縁付鈕Ⅱ式の銅鐸と多鈕細文鏡が発見されており、青銅器埋納地として古くから著名である（高橋 1919）。近年の発掘調査では、観音寺本馬遺跡において方形周溝墓群が検出され墓域の様相が（鈴木編 2014）、秋津・中西遺跡において広大な水田遺構や埋没林が検出され生産域の様相が、それぞれ明らかとなっている（松岡 2011、岡田・松岡 2012、本村・中野 2013、岡田・絹島・中東 2013、岡田・中野 2015、岡田・木村 2015、絹島 2015）。後者については、全国でも最大規模のものであり、秋津・中西遺跡周辺が有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられる。

古墳時代に入ると、前期では鴨都波 1 号墳が著名である（藤田・木許編 2001）。一辺約 20 m の小規模な方墳ながら、4 面の三角縁神獸鏡や方形板革綴短甲、漆塗靴といった豊富な副葬品が出土した。墳丘と副葬品に見られる格差は当該期の南葛城地域を考える上で重要な視点となろう。その他にも西浦古墳（梅原 1922）やオサカケ古墳（島本 1938）、巨勢山 419 号墳（藤田編 2002）などが前期の古墳として知られているが、資料状況が良くないこともあり、鴨都波 1 号墳との関係を含めて十分に検討が及んでいない。

集落に関しては鴨都波遺跡において若干様相がわかっているものの（豊岡 1989、藤田・尼子編 1992）、その他の遺跡に関しては顕著な遺構は認められず、橿原遺跡において土坑からまとまった土器が出土している程度であった（藤田編 1994）。しかし近年の発掘調査によって、秋津・中西遺跡から前期前半の方形区画施設や独立棟持柱をもつものを含む多数の掘立柱建物、竪穴式住居が検出され（米川・菊井 2010、岡田 2011、岡田・松岡 2012、岡田・中野 2015）、名柄遺跡から前期前半の住居や良好な土器群が検出される（佐々木 2012）など、重要な成果があがってきている。

中期になると、突如として墳長 238 m を誇る大前方後円墳の室宮山古墳が築造される（秋山・網干 1959、木許編 1996、藤田・木許編 1999）。北側の周堤に接するネコ塚古墳という陪冢をもち（梅原 1922、関川 1989）、埋葬施設には長持形石棺を納めた竪穴式石室を有するなど南葛城地域の中でも隔絶した内容であり、その出現に対する歴史的評価は今後も慎重に議論していく必要がある。その後は、やや規模を縮小させながらも墳長 149 m の前方後円墳である掖上鐘子塚古墳が築造されるが（楠元編 1978 ほか）、その立地が曾我川流域へと移る点は先行する室宮山古墳との関係を考える上で注意が必要である。また、室宮山古墳の東側に位置する径約 50 m の円墳であるみやす塚古墳も、室宮山古墳との前後関係が難しいが興味深い存在である（網干 1959）。

中期の集落としては、金剛山東麓の扇状地上に広がる南郷遺跡が特筆されよう（坂編 1996 ほか）。広い範囲に居住・生産・祭祀の要素が散在しているとともに、渡来系要素の強い集落であり、葛城氏の支配拠点と考えられている。南郷遺跡内に所在する極楽寺ヒビキ遺跡では、室宮山古墳で出土した家形埴輪に類似する構造の建物跡が検出され、古墳の被葬者と集落との関係を考える上でこの



1. 観音寺本馬遺跡 2. 玉手遺跡 3. 伏見遺跡 4. 南郷遺跡 5. 鴨都波遺跡 6. 巨勢山境谷遺跡 7. 巨勢山中谷遺跡
 8. 巨勢山八伏遺跡 9. 名柄遺跡 10. 名柄銅鐸・銅鏡出土地 11. 中西遺跡 12. 鴨都波1号墳 13. 西浦古墳
 14. オサカケ古墳 15. 檜原遺跡 16. 秋津遺跡 17. 室宮山古墳 18. ネコ塚古墳 19. 掖上籙子塚古墳 20. みやす塚古墳
 21. 極楽寺ヒビキ遺跡 22. 鴨神遺跡 23. 権現堂古墳 24. 新宮山古墳 25. 水泥北古墳 26. 水泥南古墳
 27. 條ウル神古墳 28. 巨勢寺 29. 二光寺廃寺 30. 朝妻廃寺 31. 高宮廃寺跡
- A. 麻ノ谷古墳群 B. 巨勢山古墳群 C. 石光山古墳群 D. 小林古墳群 E. 石川古墳群 F. 吐田平古墳群
 G. 北窪古墳群 H. ドンド垣内古墳群

図2 周辺の主要遺跡分布図

上ない成果といえる（北中編 2007）。その他にも、名柄遺跡で首長居館と考えられる遺構が（藤田 1991）、鴨神遺跡において中期後半と考えられる道路遺構が確認されている（近江編 1993）。

後期は大型古墳の分布が変化し、巨勢谷に大型の横穴式石室墳が築造されるようになる。主要なものとして、樋野権現堂古墳（佐藤 1916、河上 2001）、新宮山古墳（奈良県教育委員会 1980 ほか）、水泥北古墳、水泥南古墳（網干 1961b ほか）があげられ、高取町域の市尾墓山古墳、市尾宮塚古墳なども含めて巨勢氏との関連が考えられる。地理的にはやや離れるが、巨大な横穴式石室をもつ條ウル神古墳についても、近年の調査で墳長 70 m 前後の前方後円墳であることが確認できるようになった。石室の型が巨勢谷のものと同様であり、その破格の規模とともに注目される（御所市教育委員会編 2003、金澤 2015）。

群集墳に関しては、総数 800 基を超える巨勢山古墳群（藤田編 1987）や葛城山東方の独立丘陵上に立地する石光山古墳群（河上ほか編 1976）、葛城山東側斜面の尾根上に位置する小林古墳群（藤田 1987）や石川古墳群（白石 1974）、吐田平古墳群（網干 1961a）、金剛山の東側斜面尾根上に位置する北窪古墳群（末永 1932、廣岡 2002 ほか）やドンド垣内古墳群（十文字編 2007 ほか）などが存在する。これらの古墳群はおおむね古墳時代後期を中心とするものであるが、中期に築造が開始されるものや終末期にまで築造が続くものも存在している。このような状況から、金剛・葛城山東麓部は後期を中心に墓域として広く利用されていたと考えられ、それらの築造主体や古墳群間の関係等については今後の調査・検討が待たれる。

後期の集落については情報が少ないが、鴨都波遺跡や南郷遺跡で竪穴式住居などの遺構が確認できており、集落が継続して存在していることがわかる（藤田・尼子編 1992、阪本編 2002 ほか）。ただし、集落の規模などはよくわかっていないため、今後の調査成果に期待するところが大きい。

古代には寺院の造営が盛んに行われている。伽藍配置が復元できるものは巨勢寺に限られるが（河上・木下編 2004）、近年の調査で新たに検出された二光寺廃寺（廣岡 2006）では、金堂と考えられる礎石建物の一部が検出されるとともに、その周囲から多量の埴瓦や瓦が出土し、大きな成果が上がっている。その出土瓦の中には、近隣の朝妻廃寺（前園ほか 1978）、高宮廃寺（松田ほか 1993）の瓦と同範のものがあり、密接な関連を有する可能性が考えられる。

3 巨勢谷古墳群と麻ノ谷古墳群（図3）

北流する曾我川によって形成された狭長な谷地形は、俗に巨勢谷と呼称され、両脇の山々には数多くの古墳が築造されている。これらの多くは木棺直葬と思われる径 10 ～ 20 m の小規模な古墳であるが、広範な分布や限られた調査成果を参照すると、それら全てが同一の性格であったとは理解しにくい。そのため、平面的な古墳分布の粗密や地理的条件を勘案した支群理解が提示されている（泉森編 1980、楠元編 1982）。今後も調査の進展ごとに支群構造の理解を深めていくべきであろう。

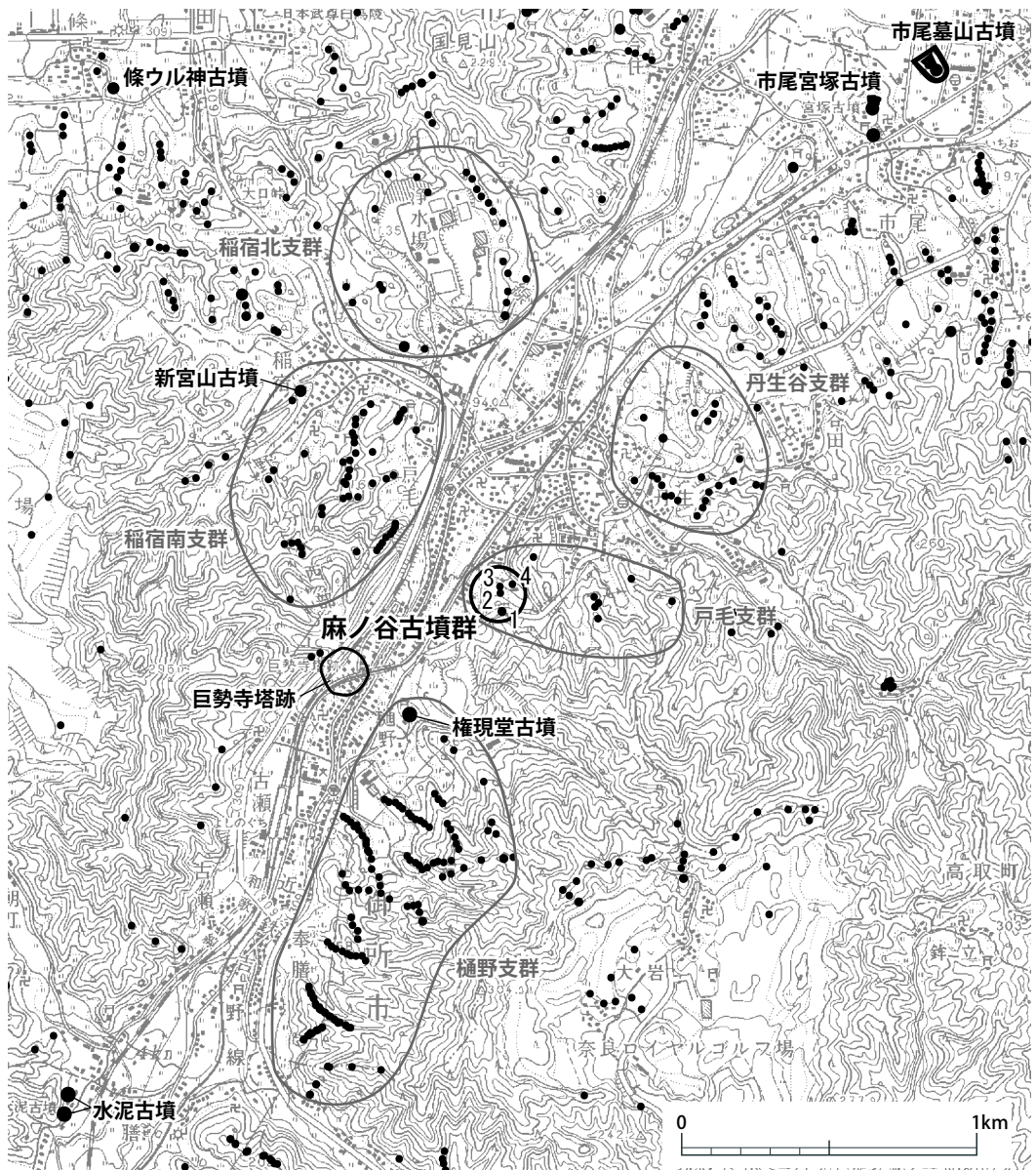


図3 麻ノ谷古墳群と巨勢谷の古墳（支群構成は楠元編 1982）

巨勢谷古墳群中には大規模な横穴式石室を埋葬施設とし、当時では最上級の棺である家形石棺を納める当地域の盟主墳と見なしうる古墳がいくつか含まれている。その嚆矢となるのが、高取町に所在する市尾墓山古墳であり、その後、市尾宮塚古墳、権現堂古墳、新宮山古墳、水坩古墳という流れで連綿と築造されている。これらについては、当時の中央政権において枢要な位置を占めた氏族である巨勢氏と結びつけて理解する考えが有力だが、巨勢谷の範囲、特に北限をどのあたりまでとみるかによって異なる理解にもなりうるため、今後も慎重な検討が必要となる。

麻ノ谷古墳群はこのような巨勢谷古墳群のほぼ中央部、上述のとおり、奈良盆地から巨勢谷への

通り道である大口峠を真正面に捉える位置に存在する。古墳群は4基で構成されており、周囲の古墳の密集度からするとやや小規模なまとまりといえる。

尾根最高所に立地する1号墳は、昭和55年（1980）に道路建設に先立つ発掘調査が行われ、6世紀前葉（MT15型式期）に築造された南側に方形張出部をもつ径20mの円墳であることが明らかとなった（楠元編1982）。埋葬施設は2基検出されており、初葬と考えられる中央棺は、長さ約3mの割竹形木棺に鉄刀、鉄鏃、鉄刀子が副葬され、棺内全面にベンガラによる赤彩が施されていたようである。

その調査後、建設工事面積を極力狭めることで、1号墳の南側1/2弱が現地保存されることとなったが、平成26年（2014）に至り、新たな土砂採取に伴う工事により、現在は消滅している。

2～4号墳については、分布調査によってその存在が認識されていたものの、今までに発掘調査が行われたことはなく、実際に古墳であるかどうかも判然としない状況であった。そのようななか、土砂採取を目的とする民間開発に先立って、2・3号墳の発掘調査が行われることとなった。

4号墳は、1～3号墳が立地する尾根が標高130mあたりでやや北東方向に膨らむ位置に存在しており、奈良県遺跡地図では径11mの円墳とされている。現状の地形観察では、目立った地形の盛り上がりは認められず、古墳かどうかは判然としない。

第2章 調査の経過

1 調査にいたる経緯

本発掘調査の契機は、平成26年11月13日、御所市戸毛1008番地の株式会社葛建設 代表取締役 平田正光氏から、御所市戸毛1091-1の一部における土砂採取に伴う切土を目的とする発掘届（第93条第1項）が提出されたことによる。当該地には麻ノ谷2～4号墳（奈良県遺跡地図「17-C-145・146・185」）が存在していた。

今回工事に伴う掘削は、3基の古墳全体に及ぶものであったため、古墳を避ける形での設計変更等について協議を行ったが、古墳を避けた形で事業を行うことが困難であるとの回答があった。

以上の状況から、3基の古墳に対して施工前の発掘調査が必要との意見書を付して、提出された発掘届を平成26年11月13日付で奈良県教育委員会に進達した。対して、奈良県教育委員会から平成26年12月17日付で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」があった。

その後、発掘調査に至るまでの間、事業者と現地での打合せを重ねた結果、4号墳については、今回の工事による掘削の影響を受けないことが確認できたため、2・3号墳の2基を対象とした当市教育委員会からの「発掘調査の通知」を平成27年4月14日付で提出した。

現地での発掘調査は平成27年4月24日～7月22日の間に行い、実働日数は44日である。



图4 2·3号墳丘測量・断面図

2 発掘作業の経過

今回の調査は、2基の古墳全体が工事により削平されることから、まず古墳の立地する尾根に平行する土層観察アゼを設定した（図4、A-B-Cライン）。加えて、現状の地形観察において墳丘の中心と思われる2地点に、尾根に直交する土層観察アゼを設定した（D-E、F-Gライン）。発掘調査にあたっては、これら土層観察アゼに沿ったサブトレンチ等を適宜設定し、下層堆積を確認しながら、全体の掘削を進めていった。

掘削は重機と人力を併用して行った。重機の利用に際しては、極力墳丘上に乗り上げないように、墳丘外と判断できる十分な控えを取った上で、尾根の周囲に重機進入用の通路を開削した。なお、2号墳の西側については、調査に入る段階で既に大きな削平を受けていた。重機掘削はこの通路から届く範囲を中心に行い、重機の届かない範囲および表土・攪乱土下の堆積については全て人力で掘削を行った。掘削途中は、層理面での遺構検出に努めるとともに、検出した遺構や土層の堆積状況について適宜写真・図面による記録を作成した。

発掘調査の成果が一通り把握できた7月14日に報道発表、同18日には一般市民を対象とした発掘調査現地説明会を行い（参加者約200名）、出来る限りの普及・啓発活動を合わせて行った。

以上のような経過をたどり、7月22日に現地での調査を全て終え、機材等の撤収を行った。

3 整理作業の経過

調査終了後、直ちに報告書作成に向けての整理作業を開始した。出土遺物は細片がその多くを占めたが、若干でも器種等の情報を引き出せたものに関しては可能なかぎり図化の対象とした。

報告書の作成には各種ソフトウェアを使用し、遺物実測図の製図のみ製図ペンを用いて行った。

出土遺物中の鉄器、顔料の分析にあたっては、奈良県立橿原考古学研究所に協力を依頼し、顔料の分析結果については、第5章-1に掲載した。また、出土した骨片等の同定作業は、パリオ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果は同章-2に掲載した。

第3章 2号墳の調査成果

1 墳丘の構造（図5・6）

（1）調査前の所見

2号墳は、1号墳と同じ尾根上、北方に20mほど下りた位置に立地し、1号墳とは直線距離で75mほど離れている。調査に着手する以前は、樹木や雑草が生い茂っており、1号墳調査時から大きな人の手は加わっていないようであった。樹木等伐採後の地形観察では、墳丘中心と想定した位置から南側にかけて比較的平坦な地形が認められたものの、それ以外の箇所では目立った傾斜変換などを見いだすことはできず、段築や葺石などの痕跡も確認できなかった。

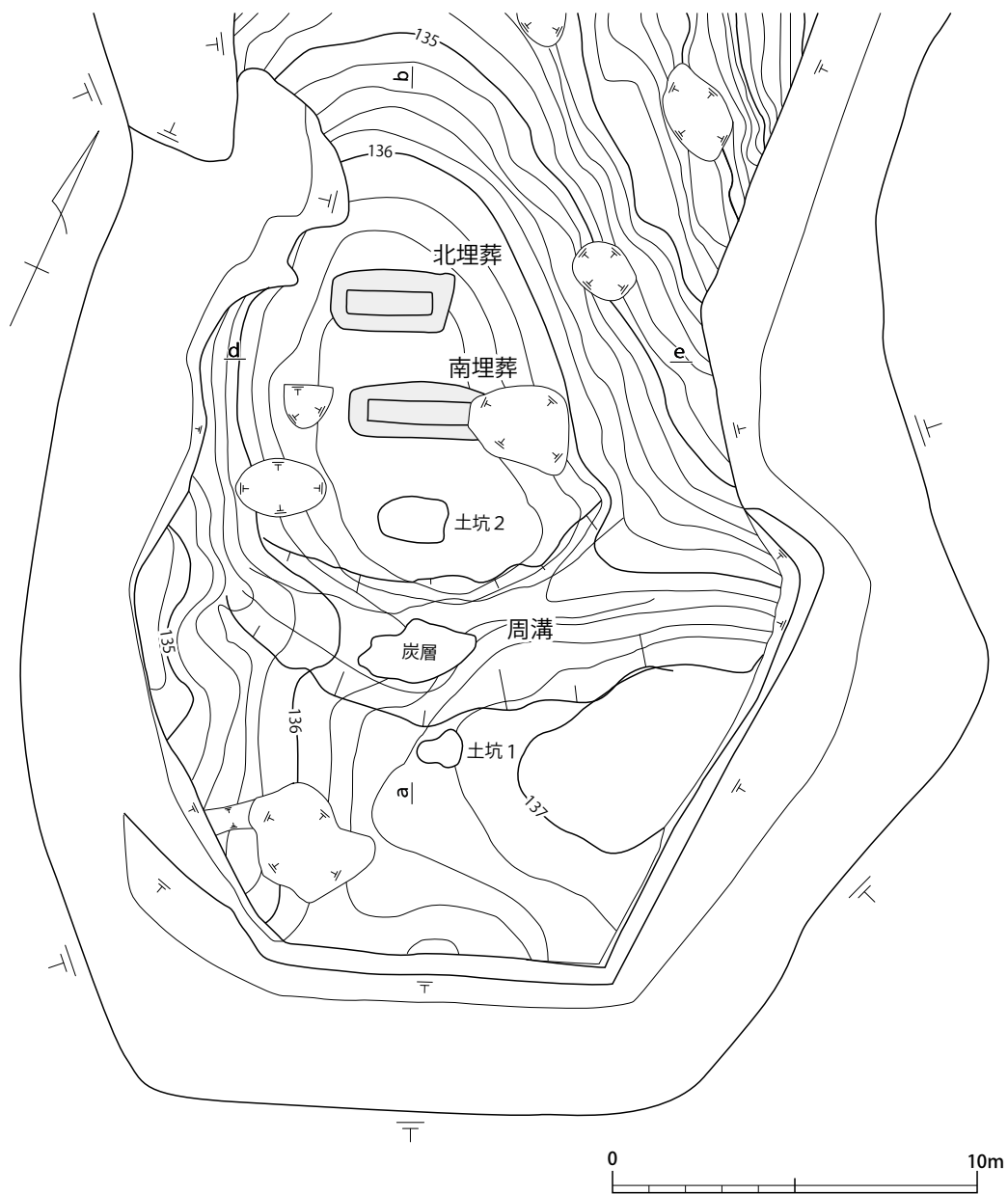


図5 2号墳墳丘測量図

(2) 墳丘

表土を0.1 m前後掘削すると、笹の根などで攪乱を受けた締まりの強い明黄褐色土層（11層）が広がっており、その土層を除去した直下で、墳丘面と考えられる黄褐色土の地山（22層）を検出した。周辺古墳の様相を考慮すると、築造当時はある程度の盛土がなされていた可能性が考えられるが、自然流出や草木の攪乱が著しく、今回の調査では明確に盛土と判断できる土層は確認でき

なかった。

(3) 周溝

墳丘南側に存在した平坦面部分のうち、A－BラインとD－Eラインの交点から南に6.5～10mの範囲では、表土直下の攪乱土層を除去した面で地山とは異なる土層の堆積が確認された(14～18層)。これらは概ね10cmの厚さで堆積しており、これらの下層で地山を検出した。つまり約3.5mの幅で地山が30cmほど窪んでいることが明らかとなった。この地山の窪みは、平面形が緩い弧状、断面形は浅い皿状を呈している。このような検出状況から、この地山の窪みは2号墳の南側を画する周溝と考えられた。この周溝は、墳丘を全周するものではなく、古墳を尾根から切り離すためになされた、最低限の造作といえる。

周溝は、検出長約12m、上端幅2.0～4.5m、下端幅0.6～2.4m、深さは最大で0.3mである。周溝内堆積土から出土した遺物には元位置を保ったものではなく、全て流入してきたものと判断できる。周溝中央部において、炭を多く含み、赤変したブロック土が混じる3.0×1.8m程度の浅い土坑状の掘り込みを検出した(15層)。掘り込み面は16・17層の上面であり、最下層である18層からは瓦器の破片が出土しているため、中世以降のものである。しかし、炭層に遺物が含まれていなかったため、その性格は不明である。

周溝より南側では攪乱土である11層直下で地山面が検出され、尾根の高所側であるものの、緩やかに標高を下げている状況であった。

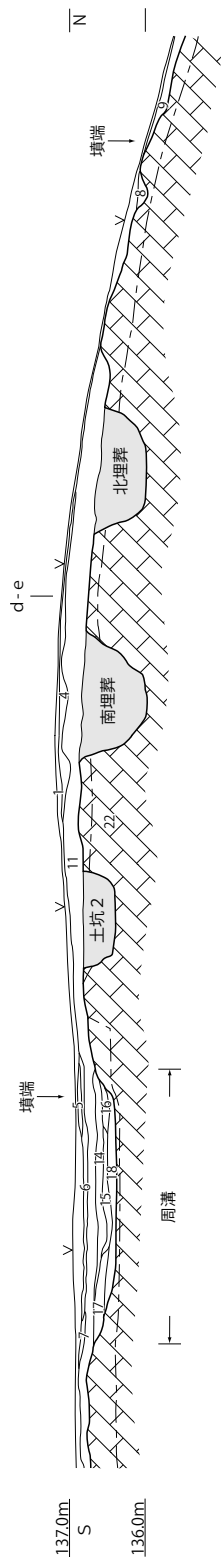
(4) 墳形と規模

まず南側の墳端については、周溝の墳丘側斜面下端をそれと認識できる。概ね136.2～136.4m付近の等高線がそれに該当し、東西斜面側には緩やかな円弧を描いて続いていく様子が観察できる。北側の墳端に関しては、墳丘測量図を観察すると、標高136.0m付近で等高線の幅に変化が認められる。全体に流出や攪乱が著しいため、多少のズレは想定されるものの、この付近を墳端と捉えるならば、2号墳は径13m程度の円墳と考えられる。しかし、周溝の続いていかない東西斜面については、自然流出が著しく、特に墳丘西側は調査前から大きな削平を受けていたため、本来の墳端は残存していないと考えられる。もとより、尾根上に築かれている小古墳であるため、正円形を呈さず、尾根筋に直交する方向の径が小さい楕円墳である可能性も考えられよう。

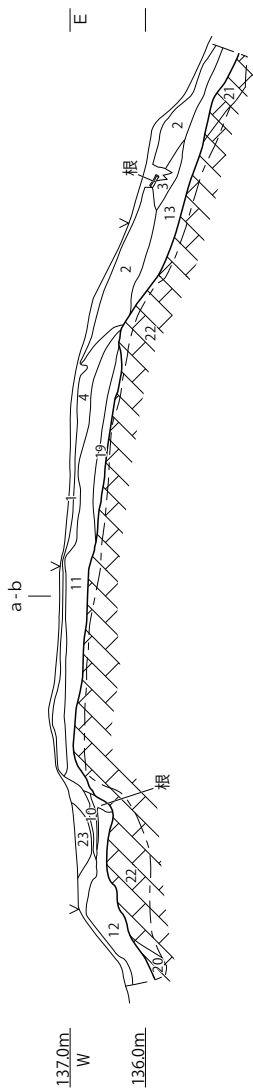
墳丘の高さについては、尾根の上方にあたる南側では残存する高さが0.5m程度であるのに対し、北側では0.9mである。

(5) 墳丘上の遺物出土状況

墳丘上に堆積していた土層からは、須恵器や土師器といった土器類が出土しているが、主に墳丘中心より南半部分での出土が多く、北東側でもわずかに出土している。土師器は細片のため、器種同定の叶わないものも多いが、須恵器には杯身や杯蓋、壺などが含まれ、墳頂上の攪乱土を中心に、墳裾付近からも出土している。全て破片資料であり、周溝埋土最下層(18層)に瓦器片が含まれ



a-b



d-e

1. 10YR3/2 (黒褐) 細～極細砂、しまり弱
2. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂、しまり弱
3. 10YR6/4 (にぶい黄褐) 極細砂、しまり弱 (根攪乱)
4. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂、しまり強
5. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂、しまり強
6. 10YR4/2 (灰黄褐) 細～極細砂、しまり強
7. 2.5Y6/2 (灰黄) 極細砂、しまり強
8. 2.5Y5/3 (黄褐) 細砂、しまり強 (根攪乱)
9. 10YR5/6 (黄褐) 細～極細砂、しまり強、5mm前後の礫が多く入る (図15-6層に対応)
10. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂、しまり弱
11. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂、しまり強
12. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂、しまり弱
13. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂、しまり弱
14. 10YR5/6 (黄褐) 極細砂
15. 2.5Y4/2 (暗灰黄) 細～極細砂、しまり弱、炭が多量に入る、赤変したブロック土が入る (炭層)
16. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂
17. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂
18. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂
19. 10YR5/6 (黄褐) 極細砂
20. 10YR5/6 (黄褐) 極細砂、極粗砂がブロック状に入る (地山)
21. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂 (地山)
22. 10YR5/6 (黄褐) 極細砂に極粗砂が多く入る、しまり弱 (地山)
23. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂、しまり弱 (客土)

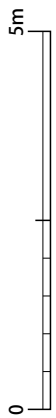


図6 2号墳墳丘土層断面図

ることから、これら土器類は元位置を保っていないと考えられる。しかし、その中には南埋葬の墓坑埋土出土の須恵器と接合する資料もあり、基本的には2号墳に伴って墳丘上に供献された土器と考えられよう。ただし、やや新しい様相を呈する須恵器も認められることから、別の機会に流れ込んできたものも若干含まれていると思われる。

2. 埋葬施設の構造

墳頂部では、尾根の稜線に直交し、南北に並列する2基の埋葬施設を確認した。ここでは北側にあるものを北埋葬、南側にあるものを南埋葬と呼称する。いずれの埋葬施設も、表土や攪乱土を除去した段階で検出した地山面を掘り込んでつくられている。しかし、攪乱土直下の地山面であり、墓坑の上部はその一部が削平されている可能性が高く、築造当時の墓坑掘り込み面が地山であったかどうかはわからない。

両埋葬施設を比較すると、墓坑の規模や棺の形式、副葬品の有無といった点で、南埋葬が優位であり、初葬と判断できる。しかし、2つの埋葬施設には切り合いがなく、墳頂部に整然と並列している有り様を考えると、両埋葬施設はそれほど大きな時間差なく埋葬された可能性が高いと考えられる。ただし、北埋葬に副葬品などが認められなかったため、その先後関係について出土遺物からの検証はできていない。

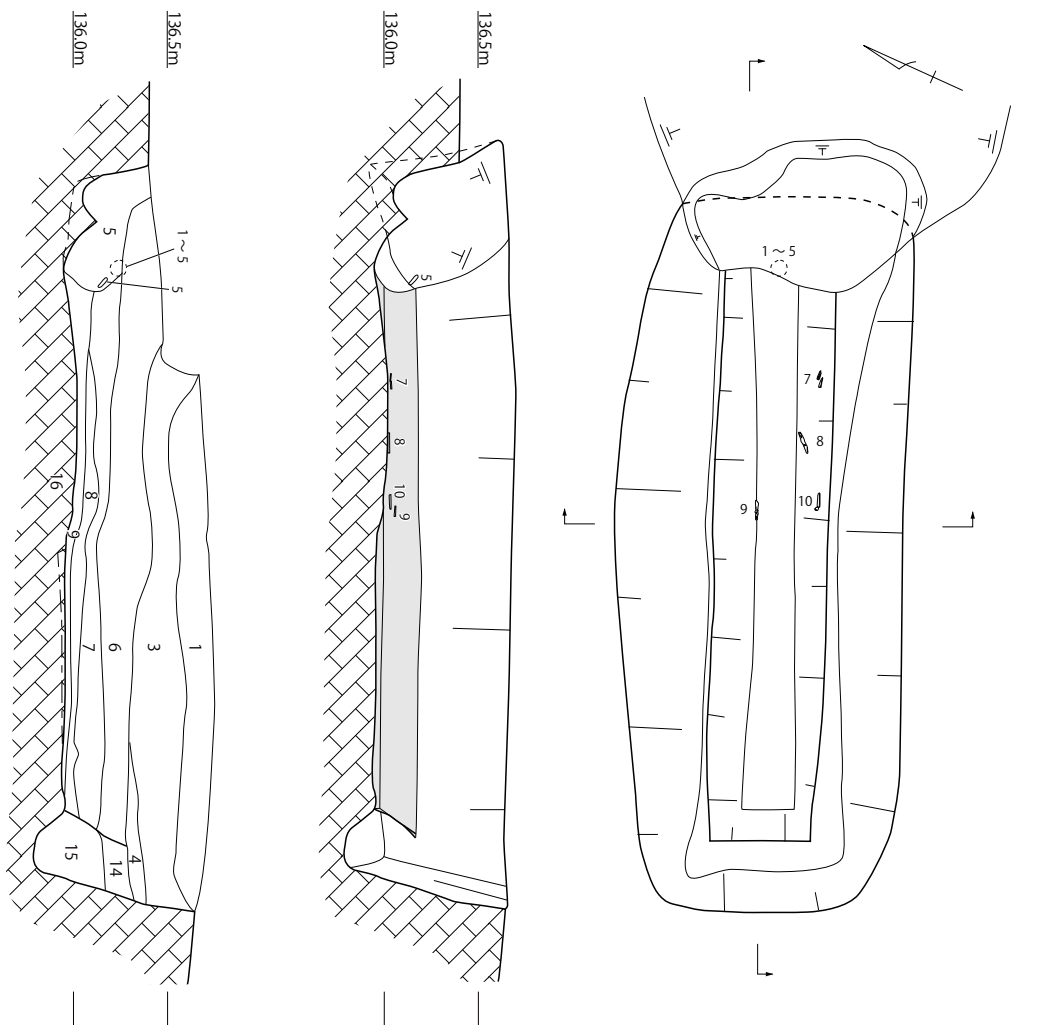
(1) 南埋葬 (図7)

墳頂部のほぼ中央に位置する木棺直葬で、墓坑・木棺ともに北埋葬に比して大きく、2号墳の中心埋葬施設である。主軸はN-67.4°-Eである。

墓坑は、地表下0.34 m、標高136.8 m付近で確認することができたが、東側の小口部が樹木の根によって大きく攪乱され残存していなかった。墓坑の平面形は、上面で長さ3.8 m、幅1.5 mの隅丸方形に復元でき、深さは0.74 m、横断面形は底がやや平らになるものの概ね半円形を呈している。墓坑底面はほぼ平らであるが、東半部にわずかな盛り上がりが見られる。主軸上の墓坑底西端には、深さ15 cm程度の窪みが認められたが、墓坑底の幅全体に広がるものではなく、何に起因するものかは判然としない。墓坑内の堆積土であるが、1～3層は締まりもよく、均質な土質から墓坑埋土と考えられる。木棺の裏込め土(10～15層)は、概ね上下2層に分けられ、下層の11・13層は締まりが弱く、墓坑と木棺の隙間に流し入れられたためであろうか。墓坑底面に置土はなく、直接木棺を据えている。

木棺は、棺材自体は残っておらず、その痕跡を確認したに過ぎないが、墓坑のほぼ中央に割竹形木棺が納められていた。墓坑同様、根攪乱により東木口部が残存していないが、棺の大きさは検出面で長さ3.0 m、幅は東木口部で0.6 m、西木口部で0.53 mであり、幾分東側の方が広がっている。検出できた高さは0.25 m程度である。

この埋葬施設からは、土器および複数器種の鉄製品が出土している。土器には須恵器と土師器が



1. 10YR6/6 (明黄褐) 細～極細砂、しまり強
明黄褐のシルトブロックが入る
2. 10YR5/6 (黄褐) 細～極細砂、しまり強
3. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂、しまり強
明黄褐のシルトブロックがわずかに入る
4. 10YR6/6 (明黄褐) 細砂
5. 10YR6/6 (明黄褐) 細～極細砂 (根攪乱)
6. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂
7. 10YR5/6 (黄褐) 細砂、しまりやや弱
8. 10YR6/6 (明黄褐) シルトに粗砂が入る
9. 10YR5/6 (黄褐) 細砂、しまり弱、3mm未満の礫が入る
10. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂～シルト
11. 10YR4/6 (褐) 細砂、しまり弱
12. 10YR5/6 (黄褐) 極細砂～シルト
13. 10YR4/6 (褐) 細砂、しまり弱
14. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂～シルト
明黄褐のシルトブロックが入る
15. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂～シルト
16. 10YR5/6 (黄褐) 極細砂に極粗砂が多く入る、しまり弱 (地山)

図中遺物番号は図10に対応

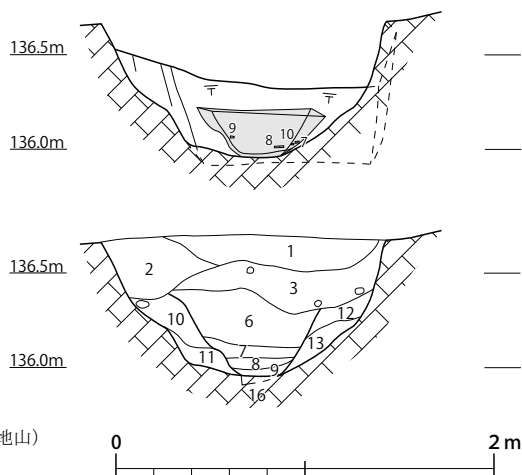


図7 2号墳南埋葬平面・立面・土層断面図

あり、いずれも破片で、墓坑埋土や棺内堆積土中からの出土である。特に須恵器片は、壺の体部片と思われるものが複数点出土しており、墳丘上で出土したものと同一個体と考えられるものである。これら破片は非常に細かく割れており、埋葬に伴う土器破碎を類推させる。しかも、これら破片の破面は歪な形状をしており、剥離片も多い（図版 10 - 3）。単なる打撃破碎ではない可能性も考えられよう。

鉄製品の器種は、鉄鏃・鉄鎌・鉄刀子であり、それぞれが出土位置を異にしている。鉄鏃は、東木口部の根攪乱内で検出され、鏃身が立った状態であったことから、元位置は保っていないと考えられる。合計 5 本の鉄鏃がまとまって出土したが、うち平根鏃が 2 本、長頸鏃が 3 本であった。鉄鎌は、1 個体のみであるが、いくつかの破片となって出土した。その破片は、一箇所にまとまっておらず棺の西半分で散在しており、元位置は保っていないと考えられる。鉄鏃や鉄鎌の破片を検出した標高が 136.1 ~ 136.2 m あたりであることを考え合わせると、これらは棺内に納められた副葬品ではなく、納棺後に棺蓋上に配置された副葬品と考えられる。鉄刀子は、合計 4 本が出土したが、それらは概ね棺底に近い標高で検出された。いずれも棺の長側辺寄りに位置し、南辺東半に 3 本、北辺中央部に 1 本である。それらの切先は南辺側のものが東向き、北辺側のものが西向きと逆になっており、刃部を被葬者側に向けていた。これら刀子は、鉄鏃・鉄鎌との出土状況の差異から、概ね元位置を保った棺内副葬品と思われ、被葬者の側部に配置されたものと考えられる。

また、副葬品以外に棺内東半部において、若干数のヒトとみられる骨片を検出した。微少な破片であり、部位などはわからないものの、上述した棺の木口幅の差異や副葬品の出土状況を踏まえると、南埋葬の被葬者は頭位を東に向けていた可能性が高いといえよう。

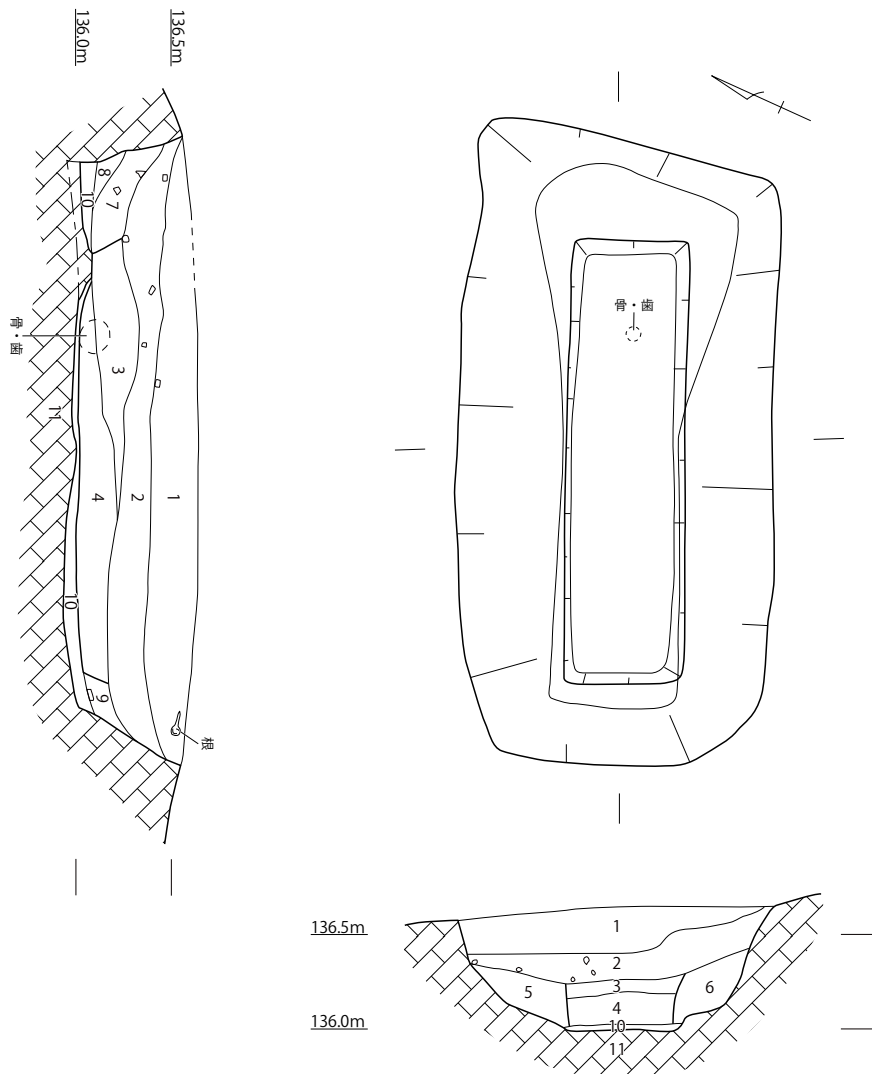
(2) 北埋葬（図 8）

南埋葬の 3 m 北側に位置する木棺直葬で、墓坑・木棺ともに南埋葬に比して小さく、主軸は N - 67.4° - E である。

墓坑は、地表下 0.3 m、標高 136.6 m 付近で確認することができた。墓坑の平面形は、上面で長さ約 3.3 m、幅 1.7 m の隅丸方形であり、深さは 0.65 m、横断面形は蒲鉾形を呈している。墓坑底面はほぼ平らであるが、東半部に若干地山が掘り残された高まりが認められる。墓坑内の堆積土であるが、1・2 層は均質な土質から墓坑埋土と考えられる。木棺の裏込め土（5 ~ 9 層）は、締めりもあり、1・2 層と類似している。墓坑底面には、厚さ 5 cm 前後の 10 層が概ね水平に堆積しており、木棺痕跡よりも広い範囲に堆積していることから、底面を整えるための置き土と考えられる。

木棺は、棺材自体は残っておらず、その痕跡を確認したに過ぎないが、墓坑のほぼ中央に箱形木棺が納められていた。棺の大きさは検出面で長さ 2.34 m、幅は東木口部で 0.62 m、西木口部で 0.64 m であり、検出できた高さは 0.2 m 前後である。

墓坑内、棺内共に副葬品などの遺物は認められなかったが、棺内東半部において、ヒトとみられ



1. 10YR6/6 (明黄褐) 細砂、3mm前後の礫が入る
2. 10YR5/6 (黄褐) 細～極細砂、5mm前後の礫が入る
5cm前後のシルトブロックが入る
3. 7.5YR5/6 (明褐) 細砂に極粗砂が入る、しまりやや弱
4. 10YR4/6 (褐) 細砂、しまりやや弱、5mm未満の礫が多く入る
5. 10YR5/6 (黄褐) 細砂、3mm前後の礫が入る
6. 7.5YR4/6 (褐) 細砂、3mm前後の礫が入る
7. 10YR4/6 (褐) 細砂に極粗砂が入る、5cm前後のシルトブロックが入る
8. 7.5YR5/6 (明褐) 中砂、しまり弱、5mm未満の礫が入る
9. 10YR5/6 (黄褐) 細砂、5mm未満の礫がやや入る、5cm前後のシルトブロックが入る
10. 7.5YR5/6 (明褐) 中砂に5mm未満の礫が多く入る、5cm前後のシルトブロックがわずかに入る
11. 10YR5/6 (黄褐) 極細砂に極粗砂が多く入る、しまり弱 (地山)

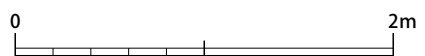


図8 2号墳北埋葬平面・土層断面図

る骨片や歯牙を検出した。北埋葬の被葬者も、南埋葬被葬者と同様に頭位を東に向けていた可能性が高いといえよう。

また、歯牙類を取り上げた際の周辺の土の中に、微量の赤色顔料が含まれていた。分析の詳細は後掲しているが、分析の結果、その顔料は水銀朱であることが明らかとなった。小指の先にも満たない程度の量しか出土していないものの、それが被葬者の頭部と思われる位置から検出されたことを踏まえると、やはり埋葬に伴う意図的な赤色顔料利用と考えられるのではないだろうか。ただし、本調査地のすぐ北側、高取町域には丹生谷という地名があることから、近傍に鉱床の存在が推測でき、そういった地理的環境により地山に水銀朱が含まれていたという可能性もあるのかもしれない。そのようなことが地質学的にあり得るのか、十分な検討ができていないため、今後の課題としておきたい。

3 出土遺物

(1) 南埋葬出土遺物

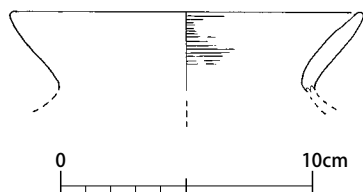
南埋葬からは、須恵器・土師器・鉄鏃・鉄鎌・鉄刀子が出土している。

①須恵器（図版 10－3）

細かな破片のため図化出来ていないが、墓坑埋土を中心に壺の体部片が出土している。これらは外面に平行タタキ、内面にナデが施され、灰色の内外面に対し破断面が灰赤色を呈する点が特徴である。破片数は 26 点を数え、半数以上が剥離片である。破片の湾曲度合いから、それほど大きな壺ではないと思われ、破片の大きさは大きいもので 3 cm 四方程度、小さいものは 1 cm 四方以下であり、剥離していないものの厚みは 0.7 ～ 1.0 cm である。これらは、全形を復元するには少なすぎる破片数であることを考えると、墓坑の埋め戻しの際に意図的に入れられたものかは即断できない。しかし、少なくとも墳丘上で土器を破碎する行為が、葬送儀礼の一環として行われていたと評価できることはほぼ間違いないであろう。さらに他の器種とは異なる先述した特異な割れ方を積極的に評価するならば、土器を用いる葬送儀礼の中で、この壺については他の器種とは異なる扱いを受けていたと考えることもできるかもしれない。

②土師器（図 9）

墓坑埋土上層から出土した土師器甕の口縁部片である。復元口径 13.8 cm、残存高 3.2 cm である。



摩耗のため、外面調整については判然としないが、内面には横方向のハケメが確認できる。

③鉄鏃（図 10－1～5、表 1）

5 点出土しており、うち 2 点が平根系鉄鏃、3 点が長頸鏃である。

図 9 2号墳南埋葬墓坑埋土出土土師器 1は、身部平面形が腸袂三角形形式のもので、頸部の一部

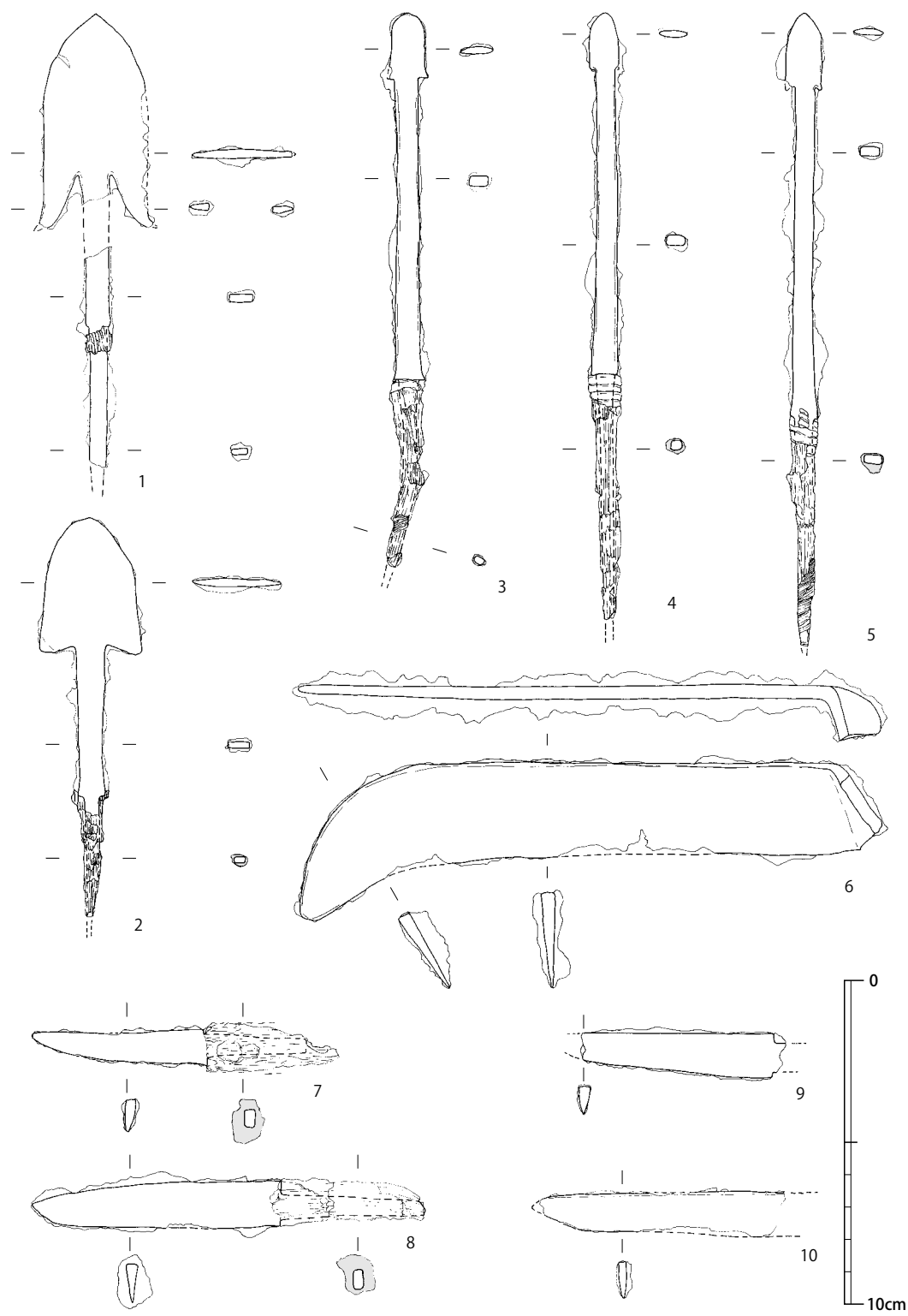


图 10 2号墳南埋葬出土鉄器

表1 2号墳南埋葬出土鉄鎌法量表

番号	全長 (cm)	身部長 (cm)	身部幅 (cm)	身部厚 (cm)	頸部長 (cm)	茎部長 (cm)	重量 (g)	有機質
図10-1	< 14.0 >	(6.5)	3.15	0.3	< 4.5 >	(4.4)	20.6	○
2	(12.3)	4.2	3.1	0.25	4.6	(3.7)	16.2	○
3	(17.1)	2.0	1.1	0.2	9.3	(5.8)	18.3	○
4	(18.7)	1.7	0.9	0.2	9.4	(7.5)	17.6	○
5	(19.5)	2.35	1.1	0.2	10.2	(7.1)	18.4	○

() 内は欠損のための現状値。< >内は推定復元値。重量は保存処理前の値。

表2 2号墳南埋葬出土鉄刀子法量表

番号	全長 (cm)	刃部長 (cm)	刃部幅 (cm)	刃部厚 (cm)	茎部長 (cm)	茎部幅 (cm)	重量 (g)	有機質
図10-7	8.15	5.1	1.0	0.3	3.05	0.6	8.0	○
8	12.0	7.65	1.4	0.35	4.35	0.7	19.5	○
9	(6.3)	(5.9)	1.3	0.3	(0.4)	0.9	11.3	
10	(7.5)	(7.5)	1.35	0.2	—	—	7.9	

() 内は欠損のための現状値。重量は保存処理前の値。

と茎端部が欠損している。身部断面は両丸、頸部および茎部断面は隅丸方形である。頸部平面形は身部関から頸部関までほぼ一直線であり、頸部関は直角に近い形態を呈する。茎部平面形も残存範囲ではほぼ直線的であり、頸部関付近にのみ矢柄の木質が遺存している。2は、身部平面形が腸袂三角形式のものであるが、逆刺は非常に浅く、茎端部が欠損している。身部断面は両丸、頸部および茎部断面は方形もしくは隅丸方形である。頸部平面形は身部関から頸部関までほぼ一直線であるが、頸部関付近で若干撥状に開き、茎部へは直角に屈曲する。茎部平面形は端部に向かって直線的に細くなり、全体に矢柄の木質が遺存している。3～5は、身部平面形が柳葉形のもので、いずれも茎端部が欠損している。身部断面は両丸、頸部および茎部断面は方形もしくは隅丸方形である。頸部平面形は身部関から直線的に伸び、頸部関は、3・5が撥形に開き、4は直角に屈曲する。茎部平面形は端部に向かって直線的に細くなり、矢柄の装着に関しては、繊維状のものを巻いた後に矢柄の木質で包み、さらにその上から樹皮を横方向に巻いている。樹皮巻きの単位などは明瞭ではない。

④鉄鎌 (図10-6)

1点が出土しており、完形に復原できた直線的な刃部をもつ曲刃鎌である。全長17.9cm、刃部幅2.9cm、厚さ0.4cm、重さ93.9gである。木柄を固定するための折り返し部の角度は、刃部に対して鈍角であり、木質の遺存は確認できない。

⑤鉄刀子 (図10-7～10、表2)

4点出土している。7・8は、切先から茎部まで残っており、切先の形状や大きさに違いがあるものの、いずれも刃と棟の両方に直角の関がつき、茎部には柄の木質が残存している。9は、刃部と関部が残存しているが、切先と茎部の大半を欠いている。刃と棟の両方に直角の関がつく。10は、刃部のみが遺存している。

(2) 墳丘出土土器

2号墳の墳丘上からは、須恵器・土師器・瓦器といった土器類が出土している。大半は須恵器で

あり、墳頂部の破片と墳丘裾付近の破片が接合するものも含まれることから、本来は墳丘上に供献されていたものが後世の攪乱等で移動してしまったものと考えられる。

①須恵器（図 11、12 - 14 ~ 17）

杯蓋 3 点、杯身 4 点、壺蓋 1 点、短頸壺 2 点、隴 3 点、壺 4 点がある。一部のものを除いて、硬質に焼成されており、色調は灰色を呈する。胎土に大きな特徴はなく、長石や石英がやや混じる密なものである。

杯蓋 1 は、口径の半分程度が残存しており、平坦な広い天井部と口縁部との境に明瞭な段を有する。口縁端部内面には緩やかな段があり、外面には木目状の圧痕が認められる。口径 14.8cm、器高 3.8cm である。回転ヘラケズリの範囲は広く、ロクロの回転方向は反時計回りである。天井部内面には同心円文の当て具痕がみられ、その後不定方向のナデを施す。2 は、口径の 3 分の 2 程度が残存しており、平坦な狭い天井部と口縁部との境に明瞭な段を有する。口縁端部には明瞭な窪みがあり、口径 15.6cm、器高 4.7cm である。回転ヘラケズリの範囲は広く、ロクロの回転方向は時計回りである。天井部内面には不定方向のナデが認められる。3 は、口径の 12 分の 1 程度しか残っていないが、天井部と口縁部との境に明瞭な沈線を有する。口縁端部内面にも弱い沈線があり、復元口径 16.8cm、残存高 4.0cm である。回転ヘラケズリは、天井部と口縁部の境付近にまで施され、ロクロの回転方向は時計回りである。

杯身 4 は、口径の 7 分の 1 が残存しており、底部は残存しない。復元口径 13.0cm、残存高 3.5cm である。口縁端部内面には、弱い沈線がわずかに確認できる。5 は、口径の 14 分の 1 程度しか残っておらず、こちらも底部が残存していない。復元口径 14.4cm、残存高 3.2cm である。口縁端部は内傾する面をもち、その面に弱い沈線がある。6 は、受け部径の 10 分の 1 が残存しており、口縁端部や底部を欠いている。受け部の突出が弱く、口縁部も内傾の程度が強い。復元受け部径 14.8cm、残存高 1.5cm であり、7 と同一個体の可能性がある。7 は、全体の半分程度が残存しており、口径 12.8cm、器高 3.6cm である。口縁端部は丸くおさめており、4・5 に比して、口縁部の内傾が強く、長さも短い。ロクロの回転方向は時計回りで、破損のため全体像はわからないものの、底部外面に 4 本の直線が並ぶ断面 U 字形の線刻が認められる。全体に扁平な器形をしており、6・7 だけが時期的に新しい要素を有している。これらは、周溝よりも南側の墳丘外から出土しており、2 号墳に伴うものではない可能性が高いと考えられる。

壺蓋 8 は壺蓋の破片で、天井部と口縁部の境に弱い沈線が巡っている。天井部が残っておらず、つまみの有無はわからない。口径の 6 分の 1 程度が残存し、復元口径 10.9cm、残存高 2.5cm である。口縁端部は内傾する面をもち、ロクロの回転方向は時計回りである。内外面に黒色の自然釉が付着している。

短頸壺 9 は口縁部のみの破片であるが、口径の 10 分の 1 が残存しており、復元口径 10.0cm、残存高 1.8cm である。口縁端部は丸くおさめられている。10 は、底部から頸部の立ち上がりまでが

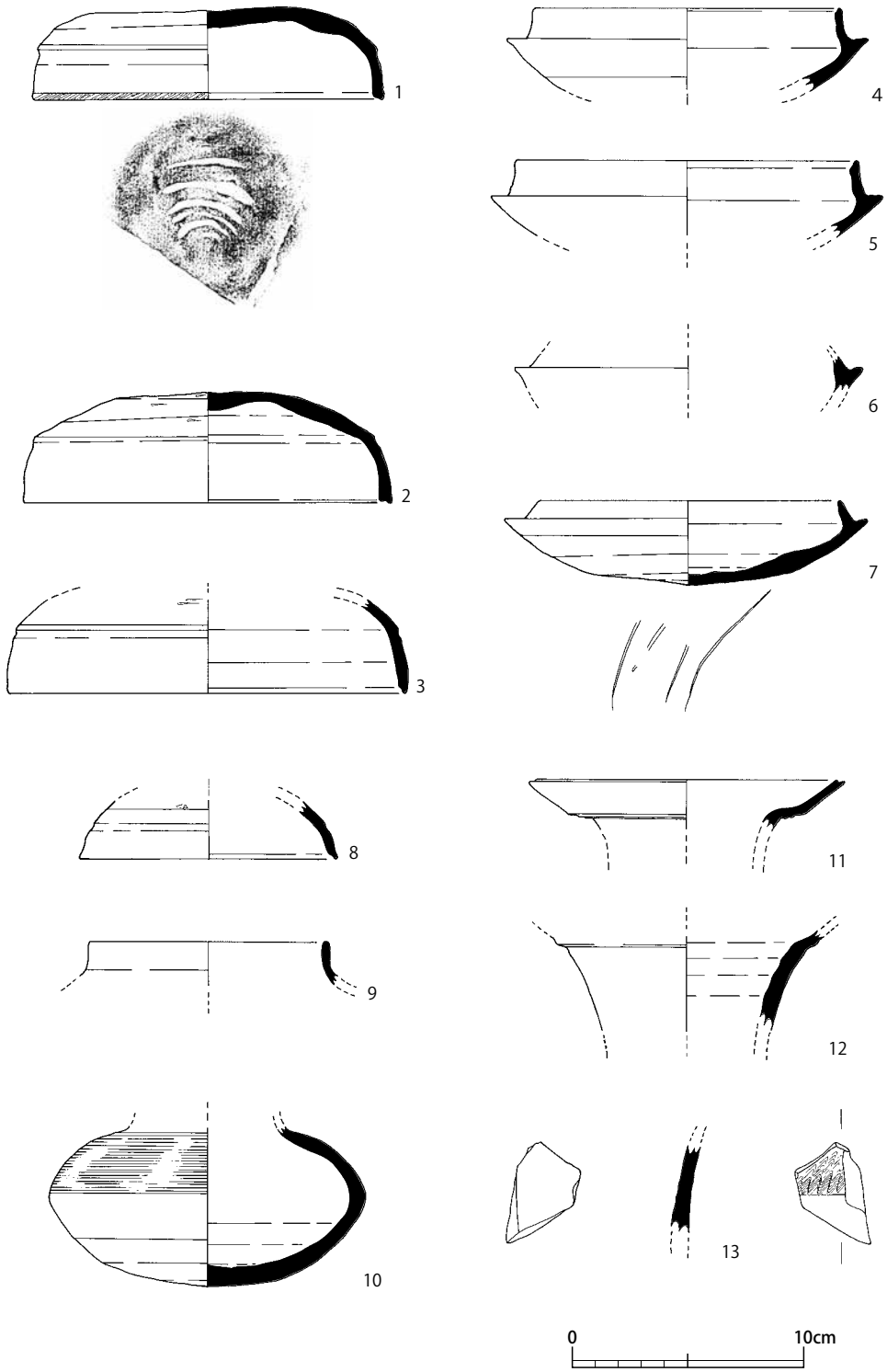


图 11 2号墳填丘出土土器(1)

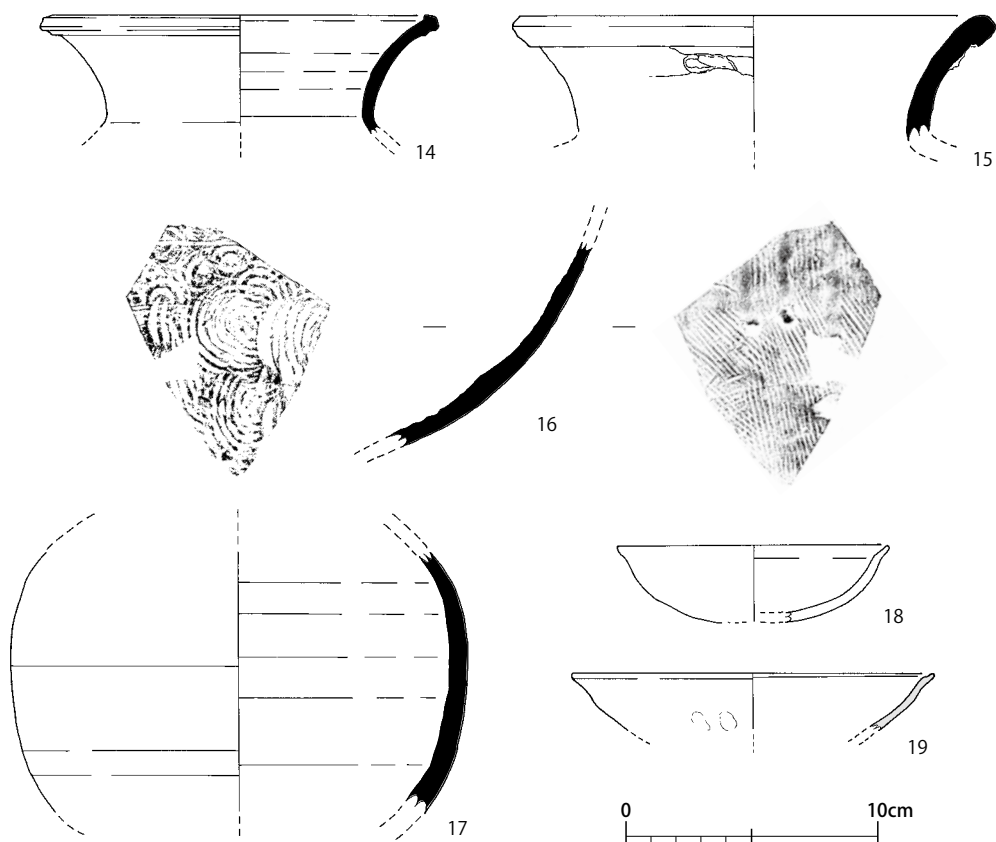


図12 2号墳墳丘出土土器(2)

残存しており、口縁部を欠いている。頸部径 6.6cm、胴部最大径 13.4cm、残存高 6.7cm であり、全体に扁球形を呈すとともに、器壁の厚みが 0.5 ~ 0.8cm とどっしりとした印象である。胴部外面上半にはカキメが施され、底部外面にはロクロの回転方向が時計回りのヘラズリが施される。底部から肩部にかけて自然釉が付着するが、肩部に滴状に固まっている様子から、焼成時に倒立させていたようである。他のものと違い、灰白に近い色調であり、胎土にも金雲母が含まれている。

甗 11 は、口縁部の破片で、口径の 8 分の 1 が残存している。口縁端部には沈線が巡り、頸部から水平に開いた位置に明瞭な段がある。復元口径 12.8cm、残存高 2.2cm である。12 は、頸部の破片で、頸部径の 5 分の 1 が残存する。復元頸部径 7.2cm、残存高 4.2cm で、頸部の厚みも 0.6cm あり、11 に比してしっかりした作りである。13 は、小破片のため器種の同定が難しいが、ハソウの頸部片と判断した。残存高 3.7cm であり、外面に 2 段の弱い波状文が確認できる。

壺 14 は、口縁部の破片で、口径の 3 分の 1 が残存する。口縁端部は外側に肥厚し、内側は弱くつまみ出す。復元口径は 14.5cm、残存高 4.7cm であり、内外面に自然釉が付着する。少し白みがあった焼成や、自然釉の雰囲気などをみると、17 と同一個体である可能性が考えられる。15 は、14 よりも器壁の厚みから大型な口縁部の破片と思われるが、復元口径 18.2cm の 20 分の 1 しか残存

していない。口縁端部は外面に肥厚し、端部より下位の外面に炭化物が付着している。残存高は4.9cmである。16は、体部の破片で、径復元は叶わなかったが残存高8.1cmである。外面には平行タタキが施され、木目に直交する方向に刻みをいれた工具である。内面には同心円文の当て具痕が見られ、その上から密ではないがヨコナデが施される。内外面に自然釉が付着するが、外面には上から垂れ下がってきた3条の自然釉が認められ、この破片が体部下半であることがわかる。17は、球形を呈する体部中位の破片で、体部最大径17.9cm、残存高10.2cmである。全体が白みがかった焼成で、内外面に自然釉が付着する。外面下半には回転ヘラケズリが施されるが、ロクロの回転方向はわからない。

図化できていないが、墓坑埋土から出土したものと同様に、細かく破片になった壺の体部片が20点出土している（図版14-1）。これらは同一個体と考えられ、外面に平行タタキ後カキメ、内面に同心円文の当て具痕がみられ、白みのある灰色を呈すやや軟質のものである。墓坑埋土出土品とは異なり剥離片自体はないものの、内面が薄く剥離したものが多。湾曲が緩いことから、より大型になると思われ、破片の大きさは大きいもので7cm四方程度、小さいものは2cm四方以下であり、厚みは0.6～1.1cmである。墓坑埋土に含まれないという点は異なるものの、これらも墳丘上における土器破碎を表すものと評価できよう。

②土師器（図12-18）

18は、杯の口縁部から体部までの破片で、底部を欠損している。口径の9分の1しか残存していないが、復元口径は10.5cm、器高は3.0cmである。摩耗が著しく、細かな調整はわからない。

③瓦器（図12-19）

19は、碗の口縁部片で、端部に沈線が巡る。復元口径14.0cm、残存高2.2cmであり、摩耗が著しく調整はよくわからないが、外面にユビオサエの痕跡が確認できる。

4 古墳に伴わない遺構（図13）

周溝の南側肩に近接する地点で土坑1、南埋葬の2.0m南側で土坑2を検出した。

(1) 土坑1

平面形は角のとれた不整三角形を呈し、断面形は平坦な底をもつ逆台形である。大きさは長いところで1.2m、短いところで0.6m、深さは0.4m弱である。埋土からの出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

(2) 土坑2

平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を呈し、長径1.9m、短径1.25m、深さ0.34mである。土坑埋土からは、完形の土師皿1点と須恵器片が出土している。土師皿は、口縁部が内湾状に丸みをもって立ち上がる形態で、口径8.6cm、器高1.5cmである。内外面は丁寧にナデが施され、外底面にのみユビオサエの跡が観察できる。口縁端部より0.8cm下位の外面には非常に弱い沈線が巡

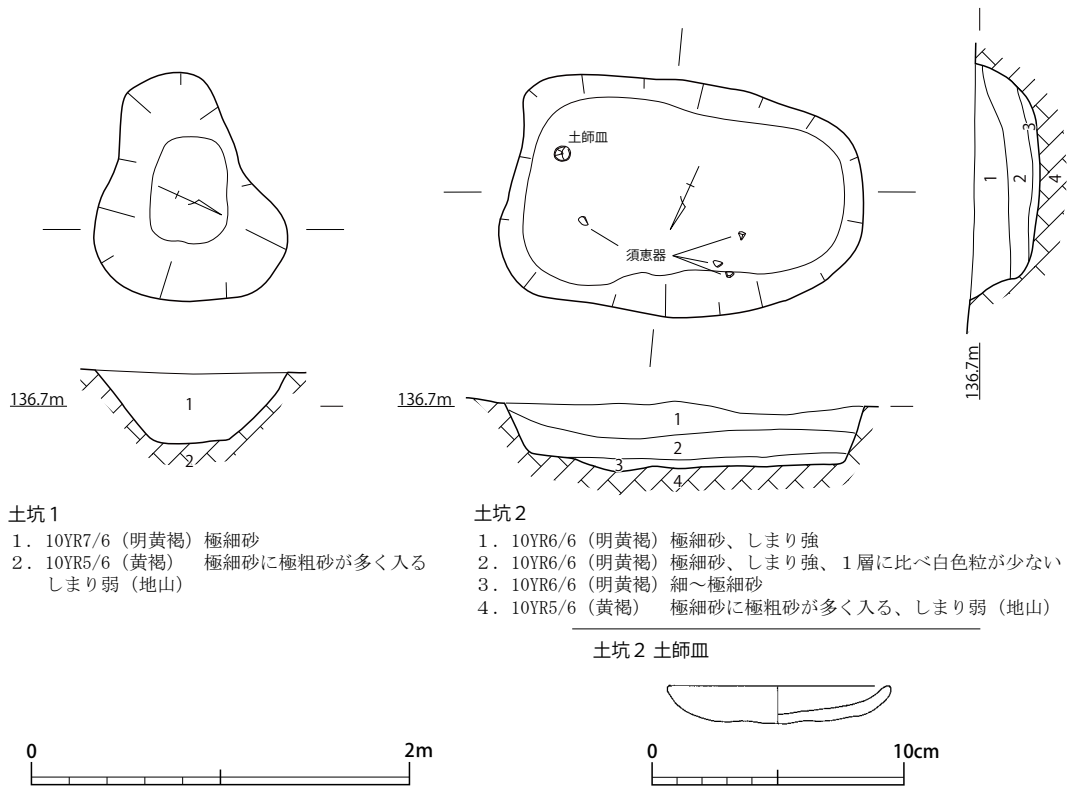


図 13 土坑 1・2 平面・土層断面図、土坑 2 出土土師皿

る。須恵器片は、破碎土器と評価した墳丘出土壺片と同一個体と思われるものが 5 片出土している。全体に白みがかっており焼成が甘い。器壁の厚さは 0.7cm ~ 1.0cm 程度であり、外面は平行タタキの後にカキメ調整が施され、内面は同心円文の当て具痕が確認できる。これら須恵器片は、土坑埋め戻し時に入り込んだものと考えられるため、完形の土師皿の存在から、土坑 2 は中世に掘削されたものと判断できる。その性格については、推測の域をでないが、土壌墓や地鎮土坑といった可能性が考えられるとともに、周溝内検出の炭層が土坑 2 と関係する可能性もあろう。

第 4 章 3 号墳の調査成果

1 墳丘の構造 (図 14・15)

(1) 調査前の所見

3 号墳は、2 号墳から北方に 2.8 m ほど下りた位置に立地し、2 号墳とは直線距離で 18 m ほど離れている。調査に着手する以前は、2 号墳と同様に樹木や雑草が生い茂っている状態であった。樹木等伐採後の地形観察では、墳丘中心と想定した位置の周囲がやや平坦になっていた。しかし、全体として北に向けて緩やかに傾斜しており、目立った傾斜変換点もなく、墳丘状の高まりや、段



図14 3号墳墳丘測量図

築、葺石などの痕跡も確認できなかった。

(2) 墳丘

2号墳と同じく、表土を0.1 mほど掘削すると、笹の根などで攪乱を受けた締まりの強い黄褐色土層(6・9～12・22層)が広がっており、その土層を除去した直下で、墳丘面と考えられる黄褐色土の地山(26層)を検出した。自然流出や草木の攪乱が著しく、今回の調査で明確に3号墳に伴う盛土と判断できる土層は確認できなかった。

(3) 周溝

B-CラインとF-Gラインの交点から南に3.6～5.0 mの範囲では、表土直下の攪乱土層を除去した面で地山とは異なる土層の堆積が確認された(23～25層)。これら土層を除去すると。断面三角形に地山が窪んでいることが明らかとなった。この地山の窪みは、平面形が直線の両端だけを北側に少し曲げたような形をしており、このような検出状況から、この地山の窪みは2号墳と同様、3号墳の南側を画する周溝と考えられる。この周溝は、墳丘を全周するものではなく、古墳

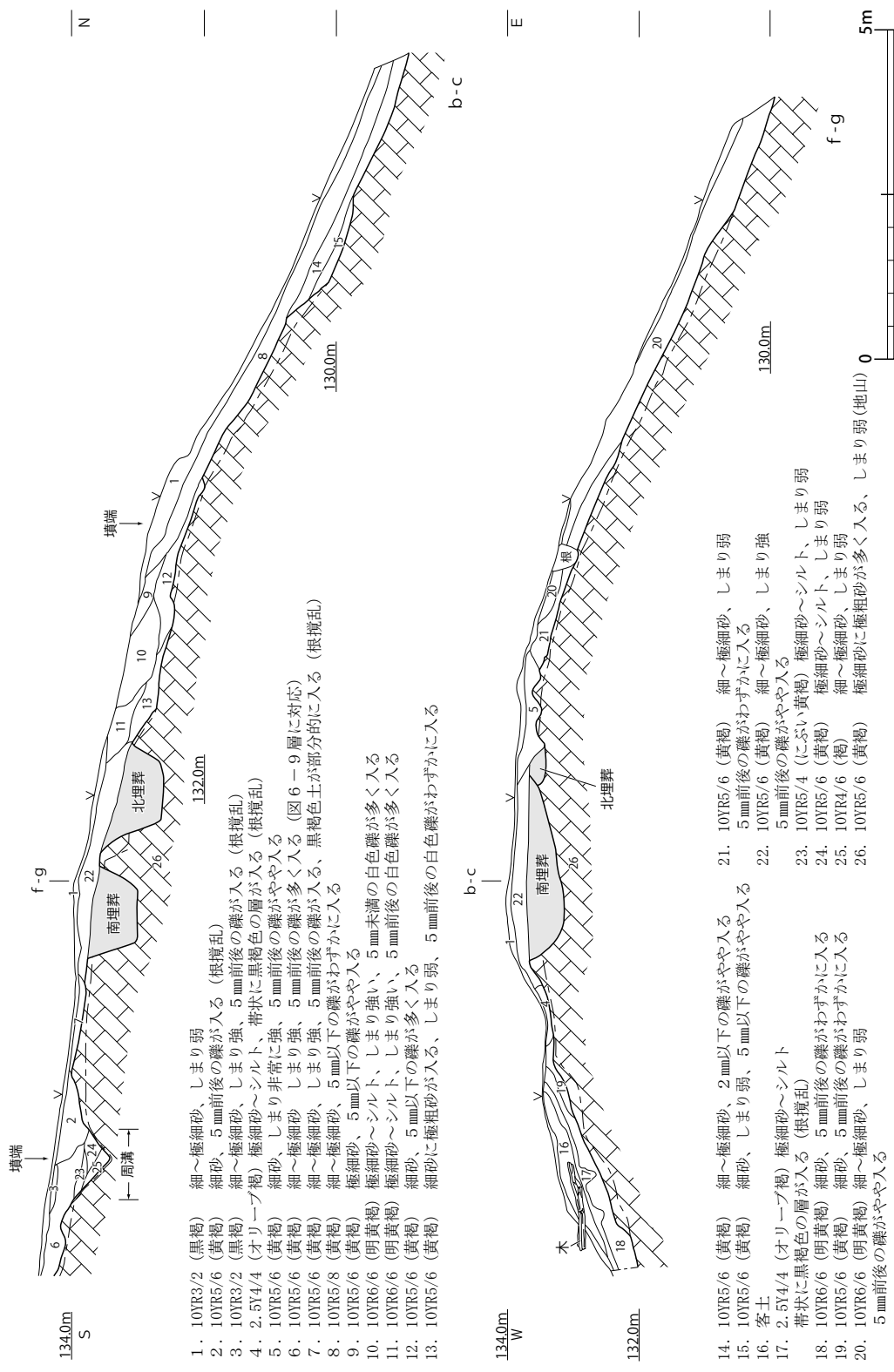


図 15 3号墳丘土層断面図

を尾根から切り離すためになされた、最低限の造作といえよう。検出長 9.2 m、上端幅 1.2～1.6 m、下端幅 0.2～0.6 m、深さは最大で 0.45 m であり、周溝内堆積土から出土した遺物はなかった。

(4) 墳形と規模

まず南側の墳端については、周溝の墳丘側斜面下端をそれと認識できる。概ね 133.6 m の等高線付近がそれに該当し、直線的に伸びたのち東西斜面側に若干の円弧を描くものの、尾根の等高線に沿って北に伸びていく。北側の墳端に関しては、墳丘測量図を観察すると、標高 132.0 m 付近で等高線の幅に変化が認められる。そして、その等高線は尾根にそった円弧を描いており、周溝に対応するような直線的な様相は認められない。全体に流出や攪乱が著しいため、多少のズレは想定されるものの、この付近を墳端と捉えるならば、3号墳は径 10 m 弱の円墳と考えられよう。東西斜面については、尾根の先端に近い立地ということもあり、明確な墳端を検出することはできなかった。本来円形に整えるための盛土があった可能性もあろうが、もともと尾根筋に直交する方向の径が小さい楕円墳であった可能性も十分考えられよう。

墳丘の高さについては、尾根の上方にあたる南側では残存する高さが 0.6 m 程度であるのに対し、北側では 1.5 m である。

(5) 墳丘上の遺物出土状況

墳丘上に堆積していた土層からは、須恵器や土師器が出土しているが、2号墳に比べるとその量は非常に少なく、いずれも墳頂部周辺の出土である。須恵器・土師器ともに細片のため、器種を同定できるものはなく、須恵器片のうち 1 点が、後述する北埋葬墓坑埋土より出土した杯身と同一個体の可能性を指摘できる程度である。

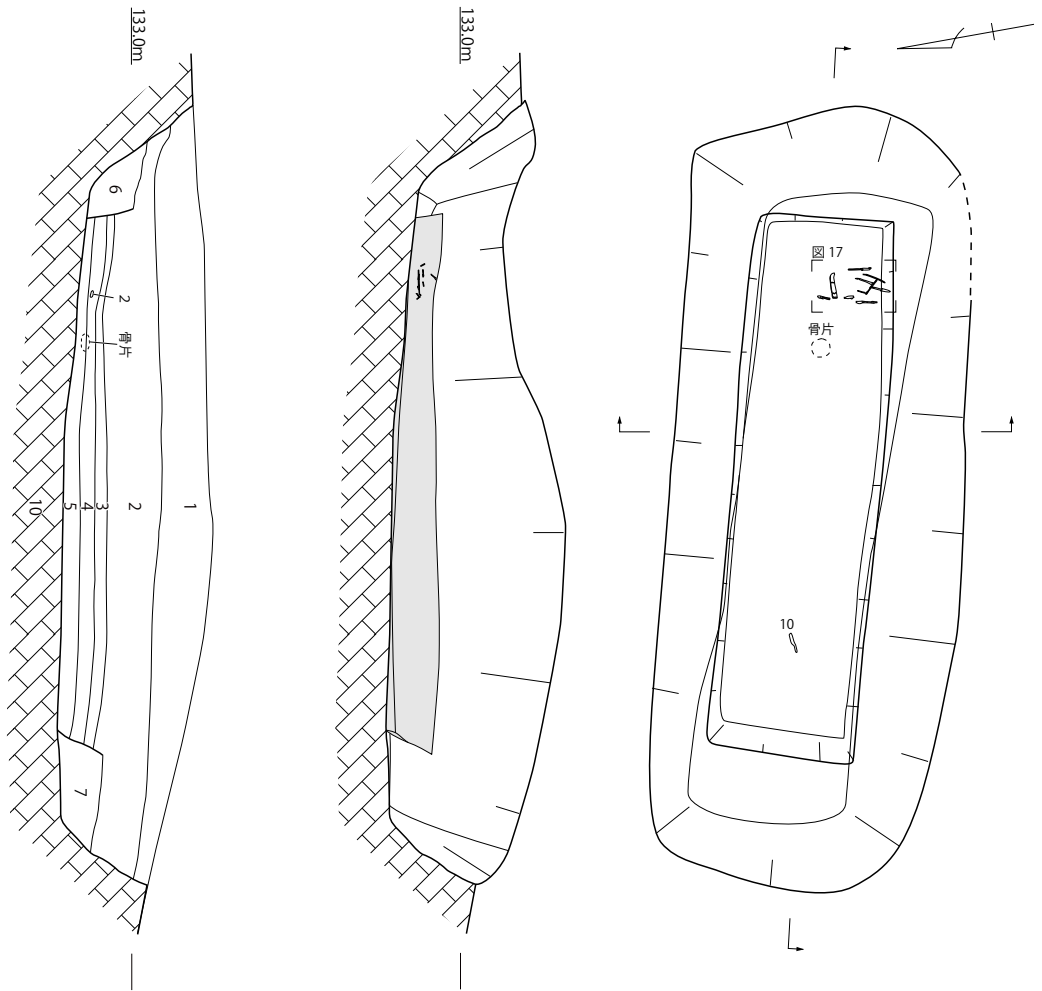
2 埋葬施設の構造

墳頂部では、尾根の稜線に直交し、南北に並列する 2 基の埋葬施設を確認した。ここでは北側にあるものを北埋葬、南側にあるものを南埋葬と呼称する。2号墳と同様、いずれの埋葬施設も、表土や攪乱土を除去した段階で検出した地山面を掘り込んでつくられている。しかし、攪乱土直下の地山面であり、墓坑の上部はその一部が削平されている可能性が高く、築造当時の墓坑掘り込み面が地山であったかどうかはわからない。

両埋葬施設には切り合いがあり、南埋葬が北埋葬の南東隅をわずかに切り込んでいることから、北埋葬が初葬と判断できる。墓坑の規模や副葬品の内容といった点でも北埋葬が優位であり、整合的である。しかし、切り合いも僅かであり、墳頂部に概ね並列している有り様を考えると、両埋葬施設はそれほど大きな時間差なく埋葬された可能性の方が高いのではないだろうか。ただし、南埋葬の副葬品が少なく、その埋葬時期差について出土遺物からの検証はできていない。

(1) 北埋葬 (図 16)

墳頂部のほぼ中央に位置する木棺直葬で、墓坑・木棺ともに南埋葬に比して大きく、3号墳の中



1. 10YR5/6 (黄褐) 細砂、しまり強、5mm以下の礫が入る
2. 10YR4/6 (褐) 細～極細砂、5mm以下の礫がわずかに入る
3. 10YR4/3 (にぶい黄褐) 細砂、しまり弱
2mm以下の礫がやや入る
4. 10YR6/6 (明黄褐) 極細砂～シルト、2mm以下の礫がやや入る
5. 10YR4/4 (褐) 中～細砂、しまり弱
5mm以下の礫が多く入る
6. 10YR4/6 (褐) 細～極細砂、5mm以下の礫がやや入る
7. 10YR4/4 (褐) 細～極細砂、5mm以下の礫がやや入る
8. 10YR5/6 (黄褐) 細～極細砂、5mm以下の礫がやや入る
9. 10YR5/6 (黄褐) 細～極細砂、5mm以下の礫がやや入る
10. 10YR5/6 (黄褐) 極細砂に極粗砂が多く入る
しまり弱 (地山)

图中遺物番号は図20に対応

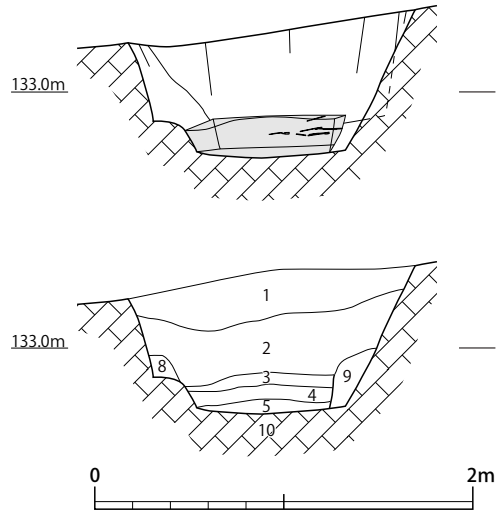


図16 3号墳北埋葬平面・立面・土層断面図

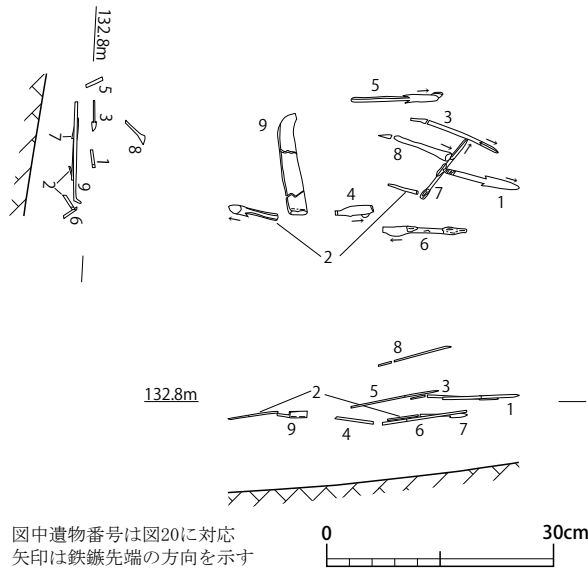


図17 3号墳北埋葬東半鉄器出土状況

木棺は、棺材自体は残っておらず、その痕跡を確認したに過ぎないが、墓坑のほぼ中央に箱形木棺が納められていた。棺の大きさは検出面で長さ2.86 m、幅は両木口とも0.8 m弱であり、検出できた高さは0.25 m弱である。

この埋葬施設からは、土器および複数器種の鉄製品が出土している。土器には須恵器杯身と土師器碗があり、いずれも完形ではなく、墓坑埋土中からまとりなく出土している。鉄製品の器種は、鉄鍬・鉄鎌・鉄刀子であり、鉄刀子だけが出土位置を異にしている。鉄鍬・鉄鎌は、東木口の南半部で検出され（図17）、鉄鍬は全て木棺長軸に直交する方向であった。鍬身の向きは大半が南側を向いているものの、北側を向くものも存在する。計8本の鉄鍬が出土したが、全て短頸鍬であり、鍬身形状も同一のものであった。鉄鎌は、1個体出土しており、木棺長軸と平行する方向であった。切先は東側を向いている。これらが出土した標高は132.78～132.87 mあたりとばらつきがあり、それぞれの向きが不揃いであることを考え合わせると、これらは元位置を保った棺内副葬品ではなく、納棺後に棺蓋上に配置された副葬品と考えられる。鉄刀子は、1本出土したが、概ね棺底に近い標高で検出された。西木口から0.6 m内側の中央部に位置し、切先は西側、刃部は北側を向いている。明確ではないものの、その出土状況の違いから、概ね元位置を保った棺内副葬品と考えられる。

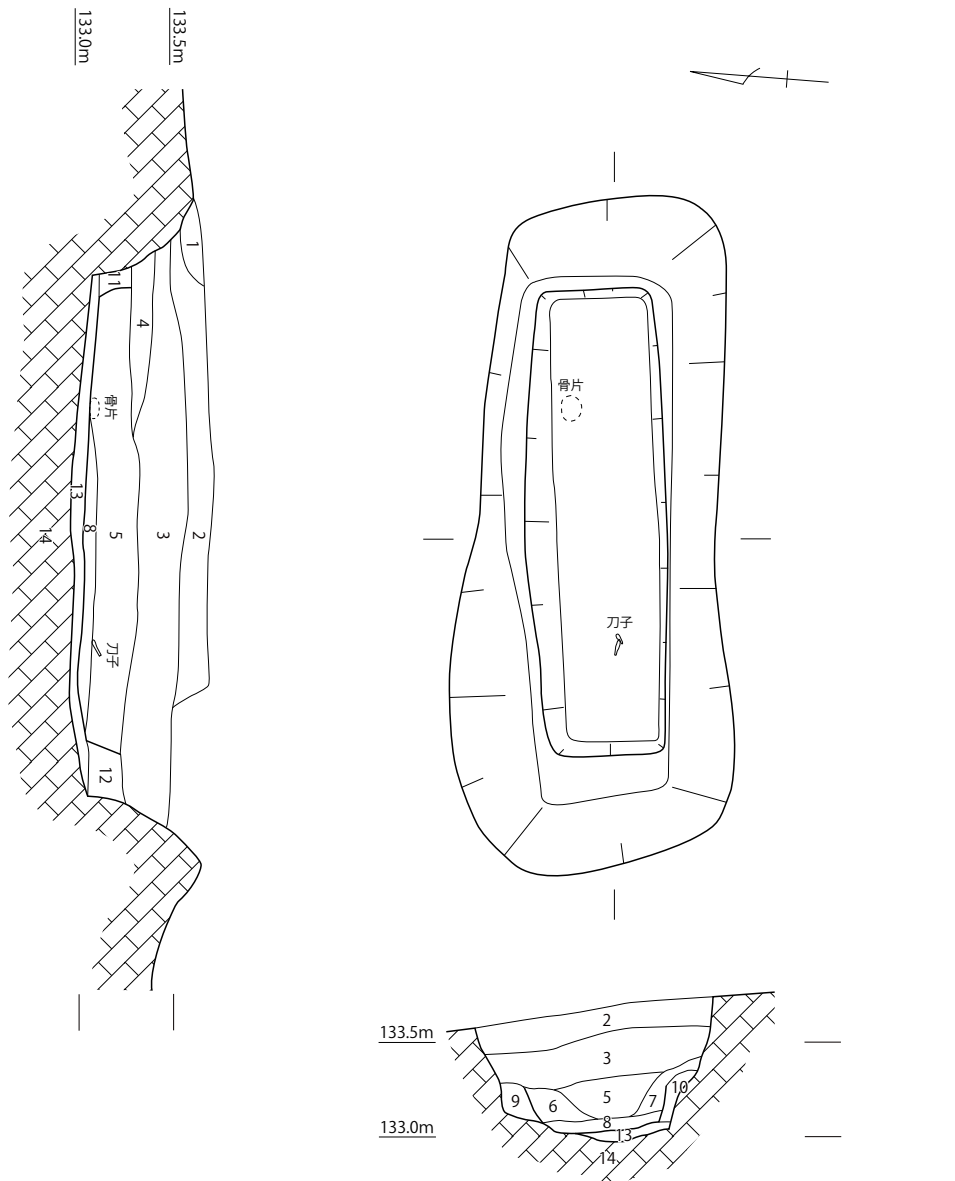
また、棺内東半中央部において、若干数のヒトとみられる骨片を検出した。微少な破片であり、部位などはわからないものの、上述した墓坑底面の高さの差異や副葬品の出土状況を踏まえると、北埋葬の被葬者は頭位を東に向けていた可能性が高いといえよう。

(2) 南埋葬（図18）

北埋葬とほぼ接した南側に位置する木棺直葬で、墓坑・木棺ともに北埋葬に比して小さい。

心埋葬施設である。

墓坑は、地表下0.25～0.4 m、標高133.3 m付近で確認することができた。主軸はS-73.7°-Eで、平面形は上面で長さ4.1 m、幅1.5 mの隅丸方形であり、深さは0.8 m弱、横断面形は北辺に若干の段があるものの、概ね逆台形を呈している。墓坑底面は、東小口が標高約132.8 m、西小口が約132.6 mであり、東側に向かって緩やかに標高を上げていく。墓坑内の堆積土であるが、1・2層は均質な土質から墓坑埋土と考えられる。木棺の裏込め土（6～9層）は、締まりもあり、1・2層と類似している。



1. 10YR5/6 (黄褐) 細砂、しまり非常に強、5mm前後の礫がやや入る (図15-5層に対応)
2. 10YR4/6 (褐) 細～極細砂、5mm前後の礫がやや入る
3. 10YR5/6 (黄褐) 中～細砂、5mm未満の礫が入る
4. 10YR5/6 (黄褐) 細～極細砂、しまり弱、2mm以下の礫がわずかに入る
5. 10YR5/4 (にぶい黄褐) 極細砂、5mm以下の礫が多く入る
6. 10YR5/6 (黄褐) 細砂、2mm前後の礫がやや入る
7. 10YR4/4 (褐) 細砂、しまり弱、5mm以下の礫が入る
8. 10YR4/4 (褐) 極細砂、5mm以下の礫が多く入る
9. 10YR4/6 (褐) 中～細砂、5mm以下の礫がやや入る
10. 7.5YR4/6 (褐) 細～極細砂、しまり弱
11. 10YR4/6 (褐) 細砂、しまり弱、5mm以下の礫が入る
12. 10YR4/4 (褐) 中～細砂
13. 10YR4/6 (褐) 中～細砂、しまり弱、5mm以下の礫が多く入る
14. 10YR5/6 (黄褐) 極細砂に極粗砂が多く入る、しまり弱 (地山)

図18 3号墳南埋葬平面・土層断面図

墓坑は、地表下 0.25 m、標高 133.7 m 付近で確認することができた。主軸は N - 84.6° - E であり、平面形は上面で長さ 3.6 m、幅 1.2 ~ 1.5 m の北西部がやや膨らむ隅丸方形であり、深さは 0.8 m 弱、横断面形は概ね逆台形を呈している。墓坑底面はほぼ平らであるが、東小口が若干高くなっている。墓坑内の堆積土であるが、1 層は攪乱であり、2・3 層は均質な土質から墓坑埋土と考えられる。木棺の裏込め土（9 ~ 12 層）は、一部に締まりの弱い土層がある。墓坑底面には、厚さ 7.0cm 程度の 13 層が概ね水平に堆積しており、木棺痕跡よりも広い範囲に堆積していることから、底面を整える置き土と考えられる。

木棺は、棺材自体は残っておらず、その痕跡を確認したに過ぎないが、墓坑のほぼ中央に箱形木棺が納められていた。棺の大きさは検出面で長さ 2.5 m、幅は両木口ともに 0.6 m であり、検出できた高さは 0.3 m 弱である。

遺物としては、墓坑埋土から土師器片、棺内から鉄刀子が 1 点出土した。土師器はいずれも細片であり器種の同定が可能なものはない。鉄刀子は、棺底より少し高い標高で検出された。西木口から 0.6 m 内側の中央部に位置し、切先は西側、刃部は南側を向いている。明確ではないが、その出土状況は北埋葬と酷似しており、元位置を保った棺内副葬品の可能性も十分考えられよう。

棺内東半部において、いくつかの骨片を検出した。その中にはヒトの頭骨の破片が含まれており、南埋葬の被葬者も北埋葬被葬者と同様に頭位を東に向けていたようである。

3 出土遺物

(1) 北埋葬出土遺物

北埋葬からは、須恵器・土師器・鉄鏃・鉄鎌・鉄刀子が出土している。

① 須恵器 (図 19)

墓坑埋土中から杯身が 1 点出土している。口径の 5 分の 1 程度、底部の大半が残存しており、口径 13.2cm、器高 4.8cm である。口縁端部は丸くおさめており、口縁部が垂直に近く立ち上がり、長さも長い。立ち上がりの付け根には浅い沈線が認められる。ロクロの回転方向は反時計回りで、回転ヘラケズリとナデの境に強い凹線が巡る。硬質に焼成されており、色調は灰色を呈する。胎土には長石、石英のほか金雲母が含まれる。

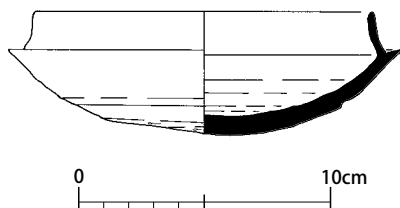


図 19 3号墳北埋葬墓坑埋土出土須恵器

② 土師器

図化できる大きさのものはなかったが、墓坑埋土中から碗の口縁部片などが出土している。口径 9.0cm 程度のものであろうか。摩耗のため、調整は不明瞭であるが、外面の一部にハケメが確認できる。

③ 鉄鏃 (図 20 - 1 ~ 8、表 3)

8 点出土しており、いずれも鏃身の形状が腸袂柳葉式の

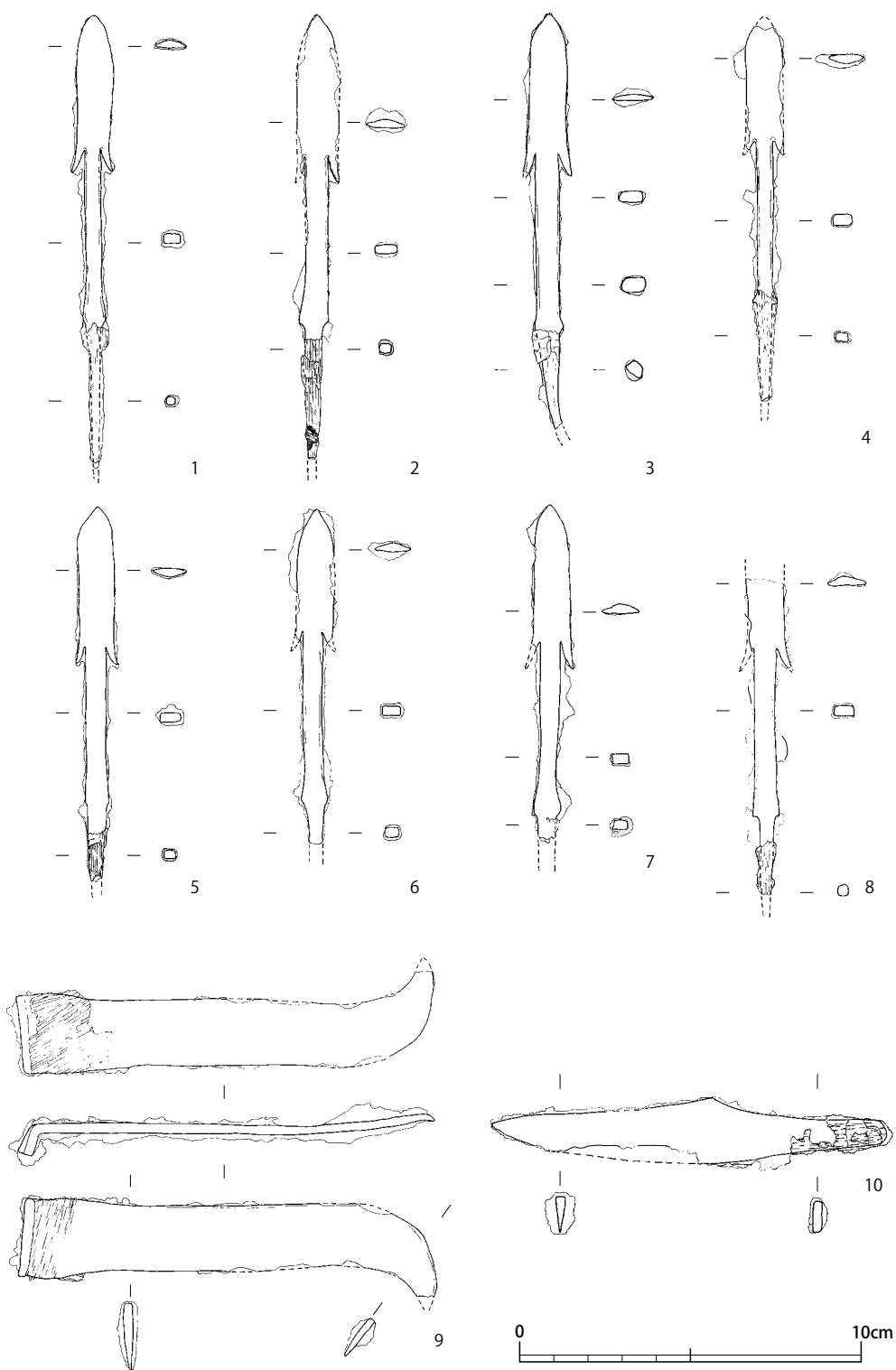


图 20 3号墳北埋葬出土鉄器

表3 3号墳北埋葬出土鉄鎌法量表

番号	全長 (cm)	身部長 (cm)	身部幅 (cm)	身部厚 (cm)	頸部長 (cm)	茎部長 (cm)	重量 (g)	有機質
図20-1	(14.0)	4.8	1.15	0.25	5.3	(4.6)	10.6	○
2	(13.8)	5.2	1.3	0.25	5.1	(4.3)	11.2	○
3	(12.3)	4.8	1.15	0.2	5.1	(3.0)	11.7	○
4	(12.3)	(4.2)	1.2	0.3	5.3	(3.2)	9.6	○
5	(11.8)	5.0	1.1	0.25	4.9	(2.5)	11.7	○
6	(10.4)	(4.1)	1.1	0.3	5.2	(1.4)	9.6	
7	(10.3)	5.0	1.1	0.3	5.2	(0.85)	9.6	○
8	(9.7)	(2.7)	1.1	0.3	5.1	(2.4)	9.5	○

() 内は欠損のための現状値。重量は保存処理前の値。

短頸鎌である。残存状況に差異はあるものの、概ね同一の形態的特徴をもち、身部断面は片丸、頸部および茎部断面は隅丸方形である。頸部の平面形は、身部関から真っ直ぐに伸び、頸部関付近で撥状に開く。頸部関は直角になるものもあるが、多くは緩やかに茎部へ移行しナデ関状を呈する。茎部平面形は端部に向かって直線的に細くなり、遺存するものから矢柄との装着方法を復元すると、2号墳南埋葬のものと同様、繊維状のものを巻いた後に矢柄の木質で包み、さらにその上から樹皮を横方向に巻いている。樹皮巻きの単位などは明瞭ではない。

④鉄鎌 (図20-9)

1点出土しており、先端は欠損しているものの、直線的な刃部をもつ曲刃鎌である。全長13.4cm、刃部幅2.1cm、厚さ0.3cm、重さ38.2gである。木柄を固定するための折り返し部の角度は、刃部に対してほぼ直角であり、遺存する木質は、折り返し部の突出する側が縦方向、その裏側が横方向となっており、別材と考えられる。より強く固定するために木製楔を打ち込んでいたのだろうか。

⑤鉄刀子 (図20-10)

1点出土しており、刃部の一部が欠損しているものの、切先から茎部まで残存している。棟側の方に緩やかな関がつき、茎部には柄の木質が残存している。全長10.7cm、刃部長6.0cm、同幅1.6cm、茎部長4.7cm、同幅1.2cm前後であり、厚さは全体に0.2cm、重さは15.0gである。

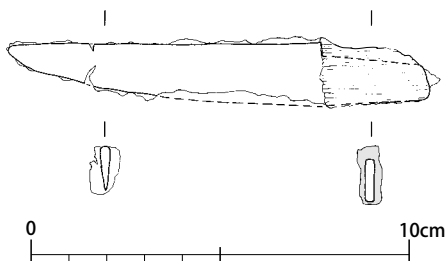


図21 3号墳南埋葬出土鉄刀子

(2) 南埋葬出土遺物 (図21)

南埋葬からは鉄刀子が1点出土しており、刃部の一部が欠損しているものの、切先から茎部まで残存している。棟側のみにはほぼ直角の関がつき、茎部には柄の木質が残存している。全長11.1cm、刃部長8.3cm、同幅1.6cm、茎部長2.8cm、同幅1.3cmであり、厚さは全体に0.25cm、重さは16.4gである。

第5章 自然科学的分析

1 麻ノ谷2号墳北埋葬より出土した赤色顔料について

御所市麻ノ谷2号墳より赤色の顔料とおぼしき小塊が出土した(図版24-4・5)。

出土品で確認される赤色には、酸化鉄系顔料の「ベンガラ」と硫化水銀(HgS)が主成分を成す辰砂を原料とする「朱」が知られている。さらにベンガラには、ストローのような管状を呈するパイプ状ベンガラとそれ以外の非パイプ状ベンガラの存在が知られている。赤色顔料は、時代や地域、彩色の対象品などによって、様々な状況で利用されていた。赤色顔料は、原始・古代に広く利用されていた顔料であるが、原料産地や使い分けなど、その利用実態は未だ解明されていない。そのため、赤色顔料の構成元素や粒子形状を知ることが、顔料利用の実態解明のため、技術的にも極めて重要である。

本件では、当古墳より出土した「赤色顔料」がどのような成分から構成されているか情報を得るため、奈良県立橿原考古学研究所において、走査電子顕微鏡(SEM)観察およびSEM付帯X線元素分析装置による元素分析を行った。

SEM観察の結果、赤色顔料は1~8 μ mほどの不定形な粒子から構成されていた(図版24-6・7)。観察画像においては、この不定形粒子は板状を呈しているものと推察された。

観察に引き続き元素分析を行った。元素分析の結果、Hg(水銀)を顕著に検出し、O(酸素)、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、Fe(鉄)を僅かに検出した。このことから本件の赤色顔料はHgを主成分とする辰砂であると考えられる。Hgと同時に検出したFeは、土壤中の成分であると考えられる。

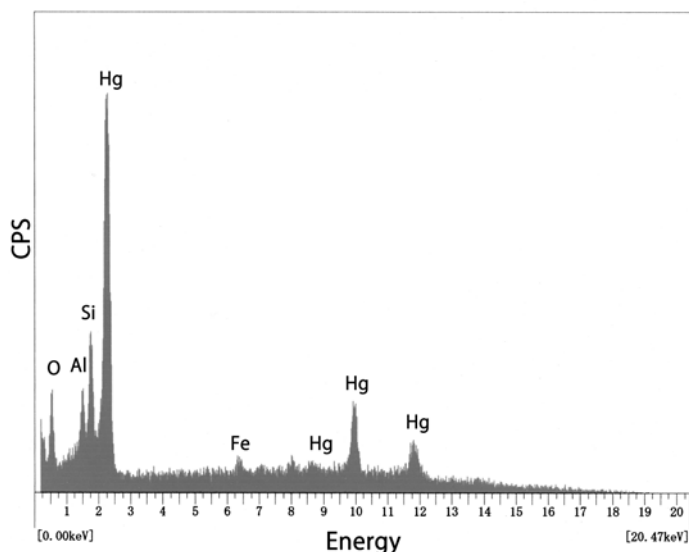


図22 麻ノ谷2号墳北埋葬より出土した赤色顔料の蛍光X線スペクトル

2 麻ノ谷2・3号墳出土人骨について

(1) はじめに

本報告では、麻ノ谷2号墳・3号墳から出土した人骨についての同定結果を述べる。

(2) 試料

試料は、2号墳の北埋葬から5試料と南埋葬から2試料、3号墳の北埋葬から1試料と南埋葬から2試料、合計10試料である。歯牙などの破片であり、表面に砂・シルト分が若干みられる。

なお、試料の詳細は、結果とともに表示する。

(3) 分析方法

一部の試料については一般工作用接着剤を用いて接合・復元する。試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種・部位の同定を行う。また、歯牙の計測は、藤田(1949)に基づき、デジタルノギスを使用して計測する。なお、年齢に関しては、幼児が1～5歳程度、小児が6～15歳程度、成人が16歳程度以上、成年が16～20歳程度、壮年が20～39歳程度、熟年が40～59歳程度、老年が60歳以上を表す。

(4) 結果

同定結果を表4、歯式を表5、歯牙計測値を表6に示す。また、2号墳北埋葬の検出部位を図23に示す。以下、地点ごとに結果を示す。

① 2号墳 北埋葬

No.56・86・113・116 および棺内東半 No.116 の5試料である。左側頭骨錐体部、右上顎第2小白歯、左下顎第1切歯～下顎第3大白歯、右下顎第1・2切歯、右下顎第1・2大白歯、歯牙片、第1頸椎、ヒトとみられる部位不明破片などがみられる。なお、No.113では、腹足綱の可能性のある破片がみられる。

② 2号墳 南埋葬

No.64・70の2試料である。ヒトとみられる部位不明破片、種類部位ともに不明破片がみられる。

③ 3号墳 北埋葬

No.98の1試料である。ヒトとみられる部位不明破片である。

④ 3号墳 南埋葬

No.80・115の2試料である。ヒトの右側頭骨錐体部、ヒトとみられる頭蓋骨?・部位不明破片などがみられる。

(5) 考察

2号墳南埋葬および3号墳北埋葬でみられた骨片は、ヒトの可能性のあるものの、明らかにヒトと判断できる部位が検出されないため詳細不明である。また、3号墳南埋葬では右側頭骨錐体部が確認されることから埋葬者はヒトと判断されるが、検出された試料から性別および年齢に関して明らかにすることができない。

表4 骨同定結果

古墳	埋葬	位置	No.	種類	部位	左 右	部分	数量
2号墳	北埋葬		56	ヒト	下顎第1切歯	左	ほぼ完存	1
					下顎第2切歯	左	ほぼ完存	1
				ヒト?	不明		破片	1
			86	ヒト	下顎第1切歯	右	破片	1
					下顎第2切歯	右	破片	1
					下顎犬歯	左	破片	1
					歯牙		エナメル質破片	5
					歯牙		歯根片	3
				ヒト?	不明		破片	3
			113	ヒト	下顎第1小白歯	左	破片	1
					歯牙		エナメル質破片	1
				ヒト?	不明		破片	1
				腹足鋼	殻		破片	1
			116	ヒト	上顎第2小白歯	右	破片	1
					下顎第2小白歯	左	破片	1
	下顎第1大白歯	左			破片	1		
	下顎第2大白歯	左			破片	1		
	下顎第3大白歯	左			破片	1		
	下顎第1大白歯	右			破片	1		
	下顎第2大白歯	右			破片	1		
	歯牙				エナメル質破片	3		
	歯牙				歯根片	1		
	ヒト?	不明			破片	7+		
棺内東半	ヒト	側頭骨	左	錐体部	1			
		第1頸椎		破片	1			
	ヒト?	不明		破片	34+			
南埋葬			64	不明	不明		破片	3+
			70	ヒト?	不明		破片	22
				不明	不明		破片	4
3号墳	北埋葬		98	ヒト?	不明		破片	14+
	南埋葬		80	ヒト	側頭骨	右	錐体部	1
				ヒト?	頭蓋骨?		破片	22+
			115	ヒト?	不明		破片	3
				礫等			破片	2

表5 2号墳北埋葬の歯式

上顎	右								左							
	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
				○												
下顎	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃
		○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

凡例) ○：遊離 I：切歯 C：犬歯 P：小白歯 M：大白歯

表6 2号墳北埋葬の歯牙計測値

上顎	歯種	歯冠幅		歯冠厚		
		左	右	左	右	
上顎	第1切歯	I ¹				
	第2切歯	I ²				
	犬歯	C				
	第1小白歯	P ¹				
	第2小白歯	P ²		7.37		
	第1大白歯	M ¹				
	第2大白歯	M ²				
	第3大白歯	M ³			9.31	
	下顎	第1切歯	I ₁	5.32	5.32	5.57
	第2切歯	I ₂	5.99	6.04	6.41	6.22
	犬歯	C	7.14		7.72	
	第1小白歯	P ₁	7.27		7.71	
	第2小白歯	P ₂	7.76		8.28	
	第1大白歯	M ₁	—	—	—	—
	第2大白歯	M ₂	12.02	—	10.81	—
	第3大白歯	M ₃	11.05		10.37	

注) —：計測不可 空欄：未検出

単位：mm

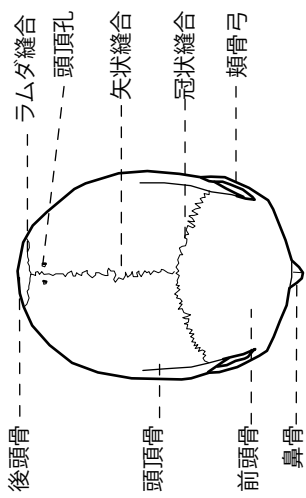
一方、2号墳北埋葬では、歯牙、左側頭骨、第1頸椎の破片が検出される。埋葬者は、第3大白歯が萌出することから、成人に達していると判断できる。また、第2大白歯の咬耗程度はわずかで象牙質が露出しておらず、また第3大白歯はエナメル質の咬耗がみられないことから、未萌出ないし萌出直後程度と推定される。したがって、本人骨は、成年後半から壮年前半よりも若い個体の可能性がある。また、歯牙計測値を権田（1959）と比較すると、性別は男性の可能性がある。

なお、本地点では腹足綱の可能性のある破片がみられるが、これは周辺に棲息していた陸産貝類に由来する可能性がある。

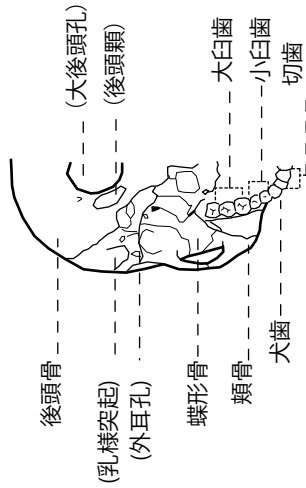
引用文献

権田 和良,1959,歯の大きさの性差について.人類学雑誌,67,151-163.

藤田 恒太郎,1949,歯の計測基準について.人類学雑誌,61,27-32.

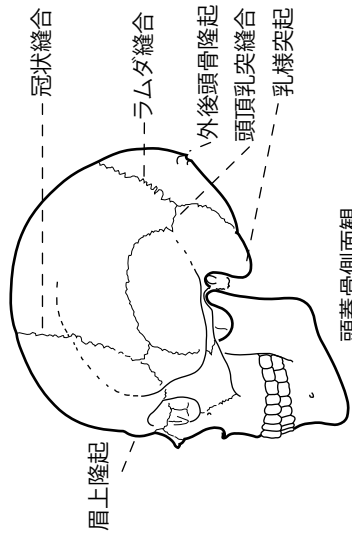


頭蓋骨上面観

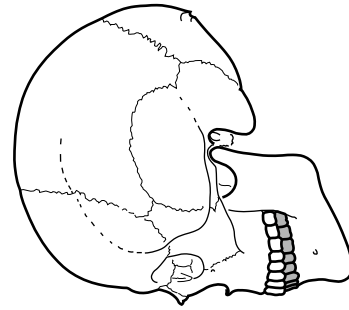
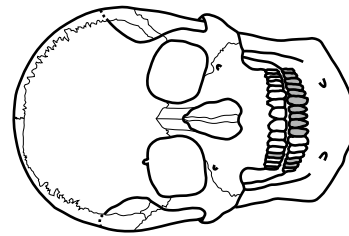
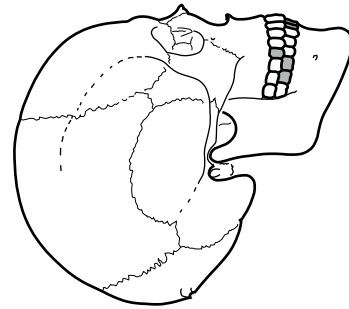
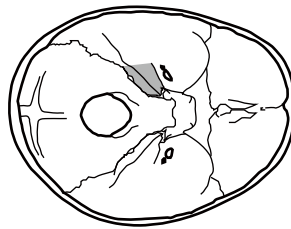


頭蓋底下面観

()は骨の部分の名称



頭蓋骨側面観



第1頸椎

■: 検出部位

頭蓋

図23 骨格各部位の名称および2号墳北埋葬の出土部位

第6章 まとめ

1 麻ノ谷古墳群の立地

麻ノ谷古墳群は、北流する曾我川によって形成された、巨勢谷の山々に造営された巨勢谷古墳群の中央部、奈良盆地と巨勢谷を繋ぐ峠道である大口峠を真正面に捉える位置に立地している。4基で構成され、周辺の古墳群と比べると小規模なまとまりである。

2 2号墳

径約 13 m の円墳と考えられ、墳丘南側にのみ浅い周溝をもつ。外表施設は特になく、盛土も今回の調査では確認できなかった。墳丘上からは須恵器を中心とする土器類が出土しており、古墳に供献されたものと考えられる。

埋葬施設は、2基の木棺直葬が検出され、中心埋葬である南埋葬は、主軸 $N - 67.4^\circ - E$ 、長さ 3.8 m、幅 1.5 m、深さ 0.74 m の墓坑に、長さ 3.0 m、幅 0.53 ~ 0.6 m の割竹形木棺が納められていた。墓坑埋土からは須恵器・土師器が出土しており、須恵器には意図的な破砕品も含まれるようである。棺内埋土からは平根系鉄鏃 2 点・長頸鏃 3 点・鉄鏃 1 点・鉄刀子 4 点が出土しており、鉄鏃・鉄鏃は棺上、鉄刀子は棺内に副葬されていたと考えられる。頭位は東と推定できる。

北埋葬は、主軸 $N - 67.4^\circ - E$ 、長さ 3.3 m、幅 1.7 m、深さ 0.65 m の墓坑に、長さ 2.34 m、幅 0.6 m 強の箱形木棺が納められていた。出土遺物は無かったが、棺内東半から頭骨片や歯牙が検出され、頭位は東と考えられる。また、頭部周辺から微量な水銀朱が検出され、意図的な赤色顔料利用の可能性も推測される。

2号墳および中心埋葬である南埋葬の築造時期は、墳丘出土須恵器や埋葬施設出土の鉄鏃から、須恵器型式でいうところの TK10 型式期（田辺 1966）と考えられる。北埋葬については、出土遺物がないため不明確であるものの、南埋葬と軸を揃えて築造されていることを踏まえると、大きな時期差無く続けて構築されたものと考えられる。

3 3号墳

径約 10 m 弱の円墳と考えられ、墳丘南側にのみ浅い周溝をもつ。外表施設は特になく、盛土も今回の調査では確認できなかった。墳丘上からは須恵器・土師器が出土しているが、2号墳に比べてその量は非常に少ない。

埋葬施設は、2基の木棺直葬が検出され、中心埋葬である北埋葬は、主軸 $S - 73.7^\circ - E$ 、長さ 4.1 m、幅 1.5 m、深さ 0.8 m 弱の墓坑に、長さ 2.86 m、幅 0.8 m 弱の箱形木棺が納められていた。墓坑埋土からは須恵器・土師器が出土しており、棺内埋土からは短頸鏃 8 点・鉄鏃 1 点・鉄刀子 1 点が出土しており、2号墳と同様に鉄鏃・鉄鏃は棺上、鉄刀子は棺内に副葬されていたと考えられ

る。頭位は東と推定できる。

南埋葬は、主軸 N - 84.6° - E、長さ 3.6 m、幅 1.2 ~ 1.5 m、深さ 0.8 m 弱の墓坑に、長さ 2.5 m、幅 0.6 m の箱形木棺が納められていた。墓坑埋土からは土師器、棺内からは鉄刀子 1 点が出土しており、棺内東半では頭骨片が検出されているため、頭位は東と考えられる。

3号墳および中心埋葬である北埋葬の築造時期は、墓坑埋土出土の須恵器などから、2号墳と同じく須恵器型式でいうところの TK10 型式期と考えられる。南埋葬については、出土遺物が少なく不明確ではあるが、北埋葬を意識した配置を想定できることから、やはり大きな時期差無く続けて構築されたものと考えられる。

2号墳と3号墳の先後関係については、3号墳出土須恵器にやや新しい様相が認められることから、同じ土器型式の幅の中ではあるが、2号墳が先に築造され、その後に3号墳が築造されたと考えられよう。

4 麻ノ谷古墳群の位置づけ

今回の発掘調査により、麻ノ谷古墳群の具体的な様相がより明らかとなった。麻ノ谷古墳群は、群中最大の径 20 m の 1号墳が6世紀前葉に尾根最高位の場所に築造され、その後6世紀中頃までの間に2号墳、3号墳の順に墳丘規模を縮小させながら、尾根の先端に向かって古墳を築造していったと考えられる。

2・3号墳で検出した埋葬施設は、巨勢谷古墳群内の他の群集墳の例に漏れず、4基とも副葬品が乏しい。そのような中で、副葬品の中に土器が認められない点、棺内副葬品が乏しく棺上に鉄製品を副葬する点は、巨勢谷古墳群内でもあまり認められない特徴といえるかもしれない。また、いずれの埋葬も頭位を東に向けているという共通点がある。尾根の稜線上に位置する古墳であるため、埋葬頭位についてもその地形の制約を受けている可能性は十分考えられるが、古墳群中で頭位にまとまりが認められる点は、古墳を築造した人たちの何らかの意図が含まれているとも考えられる。

巨勢谷古墳群の中には、市尾墓山古墳から水泥古墳に繋がる、大規模な横穴式石室に家形石棺をもつ古墳が含まれている。それらの古墳は、当該期中央政権の一翼を担う有力氏族であった巨勢氏の盟主の墓であると考えられている（河上編 1984）。麻ノ谷古墳群をはじめとした小規模な古墳については、そのような盟主を支えていた中小首長の墓という評価ができよう。

しかし、巨勢谷の古墳群の中で、麻ノ谷古墳群のように発掘調査が行われている古墳は全体から見ると非常に少なく、今回の発掘調査で得られた上記のような成果が他の尾根上の古墳群にも共通することであるのか、麻ノ谷古墳群に限られることであるのかは俄に判断できない。今後このような調査成果を蓄積していくことで、巨勢谷における中小首長の動向をより明確にしていく必要があるだろう。

参考文献

- 秋山日出雄・網干善教 1959 『室大墓』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十八冊 奈良県教育委員会
- 網干善教 1959 「御所市大字室 みやす古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第十二輯 奈良県教育委員会
- 網干善教 1961a 「御所市森脇吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第四集 奈良県教育委員会
- 網干善教 1961b 「御所市古瀬「水蓮蓮華文石棺古墳」及び「水蓮塚六古墳」の調査」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第十四輯 奈良県教育委員会
- 泉森 皎編 1980 『御所市樋野古墳群』御所市文化財調査報告書第1集 御所市教育委員会
- 梅原末治 1922 「大和御所附近の遺蹟研究」『歴史地理』第拾九卷 第四號 日本歴史地理學會
- 近江俊秀編 1993 『鴨神遺跡—第2次～第4次調査—』奈良県文化財調査報告書第66集 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一 2011 「秋津遺跡第4次調査」『奈良県遺跡調査概報 2010年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・絹島歩・中東洋行 2013 「秋津遺跡第6次調査」『奈良県遺跡調査概報 2012年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・木村理恵 2015 「秋津遺跡第7—3次調査」『奈良県遺跡調査概報 2014年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・中野咲 2015 「秋津遺跡第7—1次・7—2次調査」『奈良県遺跡調査概報 2013年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・松岡淳平 2012 「秋津遺跡第5次調査」『奈良県遺跡調査概報 2011年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田雅彦編 2013 『観音寺本馬遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第113冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 金澤雄太 2015 「條ウル神古墳」『大和を掘る 33—2014年度発掘調査速報展—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 河上邦彦編 1984 『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第5冊 高取町教育委員会
- 河上邦彦 2001 「大和巨勢谷権現堂古墳の測量調査と副葬品（後期大型円墳の意義）」『実証の地域史—村川行弘先生頌寿記念論集—』大阪経済法科大学出版部
- 河上邦彦・亀田博・千賀久編 1976 『葛城・石光山古墳群』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第31冊 奈良県教育委員会
- 河上邦彦・木下巨編 2004 『巨勢寺』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第87冊 奈良県教育委員会
- 北中恭裕編 2007 『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告書第122集 奈良県立橿原考古学研究所
- 絹島 歩 2015 「秋津遺跡第8次調査」『奈良県遺跡調査概報 2013年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 木許 守編 1992 『鴨都波 11次 発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第11集 御所市教育委員会
- 木許 守編 1995 『名柄遺跡 第4次 発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第19集 御所市教育委員会
- 木許 守編 1996 『室宮山古墳範囲確認調査報告』御所市文化財調査報告書第20集 御所市教育委員会
- 木許 守編 2007 『巨勢山古墳群Ⅵ』御所市文化財調査報告書第30集 御所市教育委員会
- 木許 守・西村慈子編 2015 『観音寺本馬遺跡』御所市文化財調査報告書第48集 御所市教育委員会
- 楠元哲夫編 1978 「御所市掖上鑑子塚前方部周濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 楠元哲夫編 1982 『御所市麻ノ谷1号墳』奈良県文化財調査報告書第36集 奈良県立橿原考古学研究所
- 御所市教育委員会 1989 『ゴルフ場開発事業に伴う 第1回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』
- 御所市教育委員会 1990 『ゴルフ場開発事業に伴う 第2回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』
- 御所市教育委員会 2010 『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅲ 平成21年度調査の概要』御所市文化財調査報告書第37集 御所市教育委員会
- 御所市教育委員会編 2003 『古代葛城とヤマト政権』学生社
- 阪本普通編 2002 『鴨都波 16次発掘調査報告—附. 平成12・13年度 個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査—』御所市文化財調査報告書第27集 御所市教育委員会
- 佐々木健太郎 2012 『名柄遺跡 第6次 発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第41集 御所市教育委員会
- 佐々木好直編 1999 『南郷遺跡群Ⅱ』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第73冊 奈良県教育委員会
- 佐藤小吉 1916 「権現堂古墳」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第三回 奈良縣
- 島本 一 1938 「琴柱形石製品の新例」『考古學雜誌』第二十八卷 第六號 考古學會
- 十文字健編 2007 『ドンド垣内古墳群』奈良県文化財調査報告書第119集 奈良県立橿原考古学研究所
- 白石太一郎 1974 「御所市石川古墳群」『奈良県の主要古墳Ⅱ』奈良県教育委員会
- 末永雅雄 1932 「南葛城郡葛城村西北窪 和田山古墳」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會抄報』第二輯 奈良縣
- 鈴木一議編 2014 『観音寺本馬遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第114冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 関川尚功 1989 「室大墓古墳外堤部発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1988年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 高橋健自 1919 「南葛城郡名柄發掘の銅鐸及銅鏡」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第六回 奈良縣
- 田辺昭三 1966 『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須器大成』角川書店
- 豊岡卓之 1989 「鴨都波遺跡第7次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1988年度』第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 豊島直博 2003 「後期古墳出土鉄鏃の地域性と階層性」『文化財と歴史学』奈良文化財研究所
- 奈良県教育委員会 1980 「新宮山古墳」『奈良県指定文化財—昭和54年度版—』
- 坂 靖編 1996 『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第69冊 奈良県教育委員会
- 坂 靖編 2000 『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第76冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 廣岡孝信 2002 「北窪遺跡」『奈良県遺跡調査概報 2001年度』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所

廣岡孝信 2006 「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報 2005 年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
 廣岡孝信・十文字健 2005 「北窪遺跡 2004 - 第 1 次調査 伏見遺跡 2004 - 第 1・2 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2004 年』
 第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
 藤田和尊 1987 「御所市・小林遺跡の調査」『季刊明日香風』第 23 号 財団法人飛鳥保存財団
 藤田和尊 1991 「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42 (1989 年度版) 日本考古学協会
 藤田和尊編 1985 『巨勢山境谷 10 号墳発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第 4 集 御所市教育委員会
 藤田和尊編 1987 『巨勢山古墳群Ⅱ - 御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査 1 -』御所市文化財調査報告書第 6 集 御
 所市企画課
 藤田和尊編 1994 『橿原遺跡Ⅰ』御所市文化財調査報告書第 17 集 御所市教育委員会
 藤田和尊編 2002 『巨勢山古墳群Ⅲ』御所市文化財調査報告書第 25 集 御所市教育委員会
 藤田和尊・尼子奈美枝編 1992 『鴨都波 12 次 概報』御所市文化財調査報告書第 12 集 御所市教育委員会
 藤田和尊・木許守編 1999 『台風 7 号被害による室宮山古墳出土遺物』御所市文化財調査報告書第 24 集 御所市教育委員会
 藤田和尊・木許守編 2001 『鴨都波 1 号墳 調査概報』学生社
 前園実知雄・関川尚功・中井公 1978 「御所市朝妻廃寺発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977 年度』奈良県教育委員会
 松岡淳平 2011 「中西遺跡第 16 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2010 年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
 松田真一 1997 『奈良県の縄文時代遺跡研究』財団法人由良大和古代文化研究協会
 松田真一・近江俊秀・清水昭博 1993 「御所市高宮廃寺について」『青陵』第 83 号 奈良県立橿原考古学研究所
 本村充保 2009 「観音寺本馬遺跡 - 京奈和自動車道 (観音寺 I 区) -」『奈良県遺跡調査概報 2008 年』第三分冊 奈良県立
 橿原考古学研究所
 本村充保・中野咲 2013 「中西遺跡第 18 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2012 年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所
 米川仁一・菊井佳弥 2010 「秋津遺跡」『奈良県遺跡調査概報 2009 年度』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所

圖 版



1 古墳群からの眺望（南から）



2 同（北東から）



1 2号墳掘削前（南から）



2 同（南東から）



1 2号墳全景（南から）



2 同（北西から）



1 2号墳周溝（西から）



2 同（東から）



1 2号墳周溝内炭層検出状況（南から）



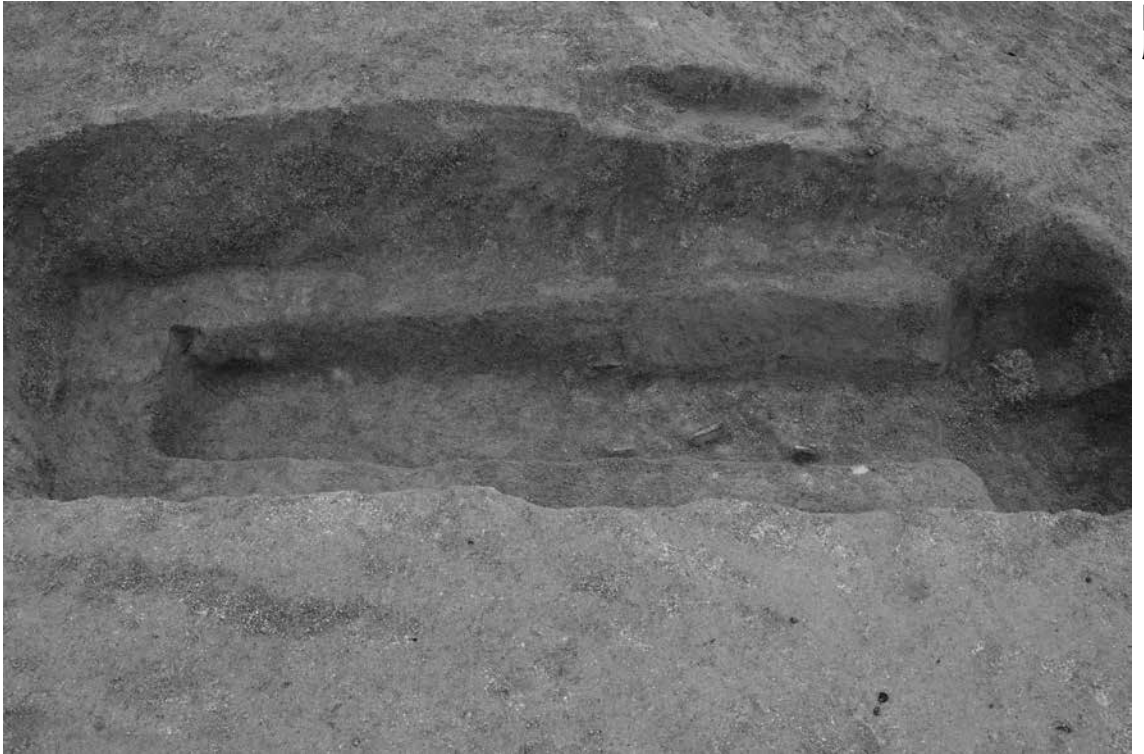
2 2号墳周溝内土層断面（東から）



1 2号墳埋葬施設（西から）



2 2号墳南埋葬（西から）



1 2号墳南埋葬（南から）



2 同横断土層断面（西から）



1 2号墳南埋葬縦断土層断面西半(南から)



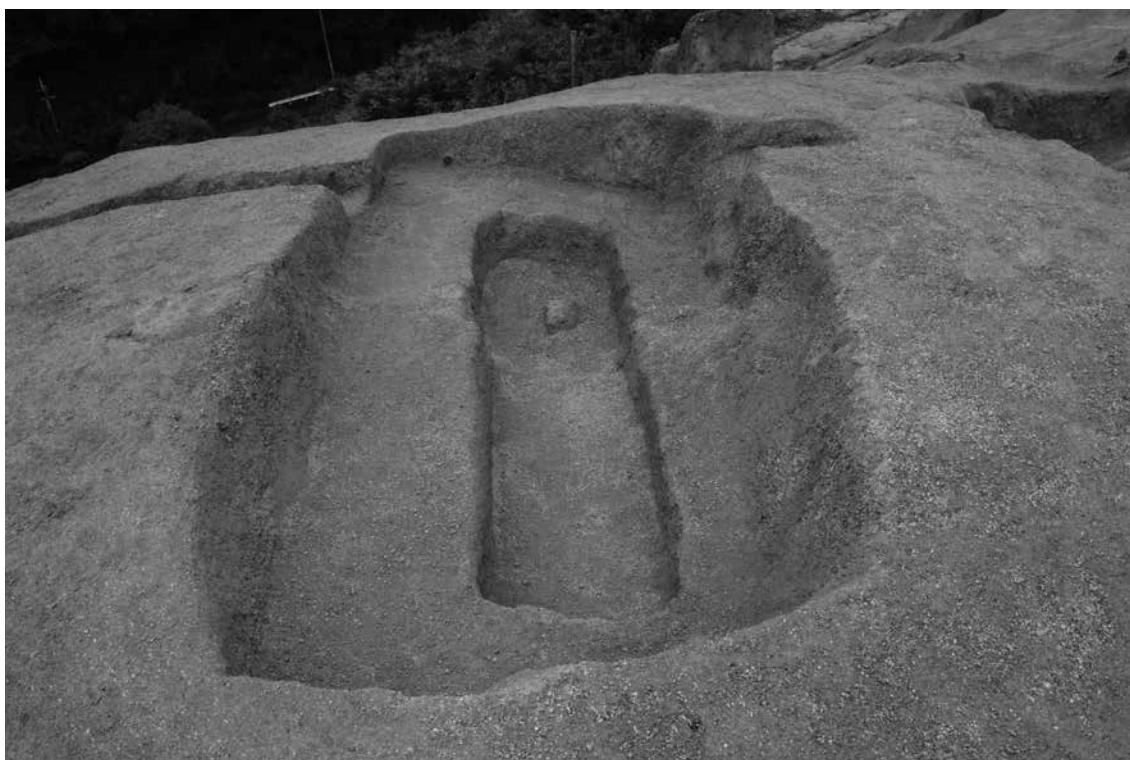
2 同東半(北から)



3 2号墳南埋葬遺物出土状況(南東から)



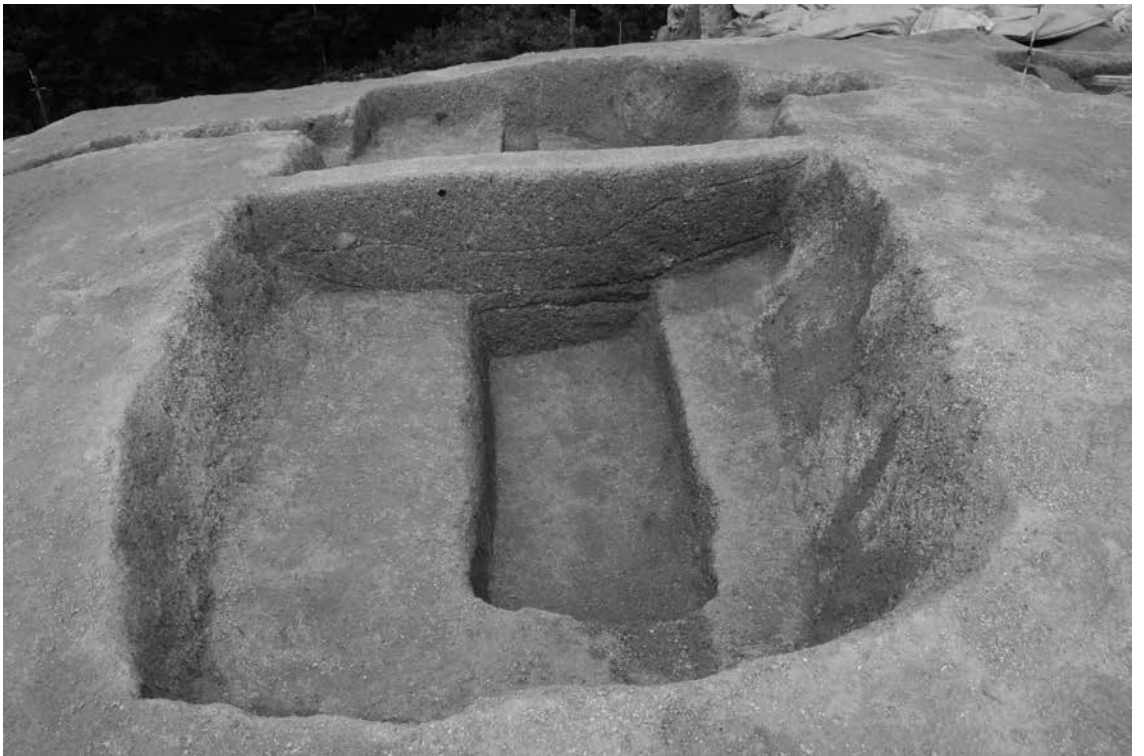
4 同(北西から)



5 2号墳北埋葬(西から)



1 2号墳北埋葬（北から）



2 同横断土層断面（西から）



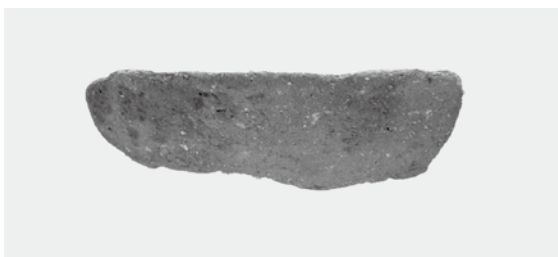
1 2号墳北埋葬縦断土層断面西半（南から）



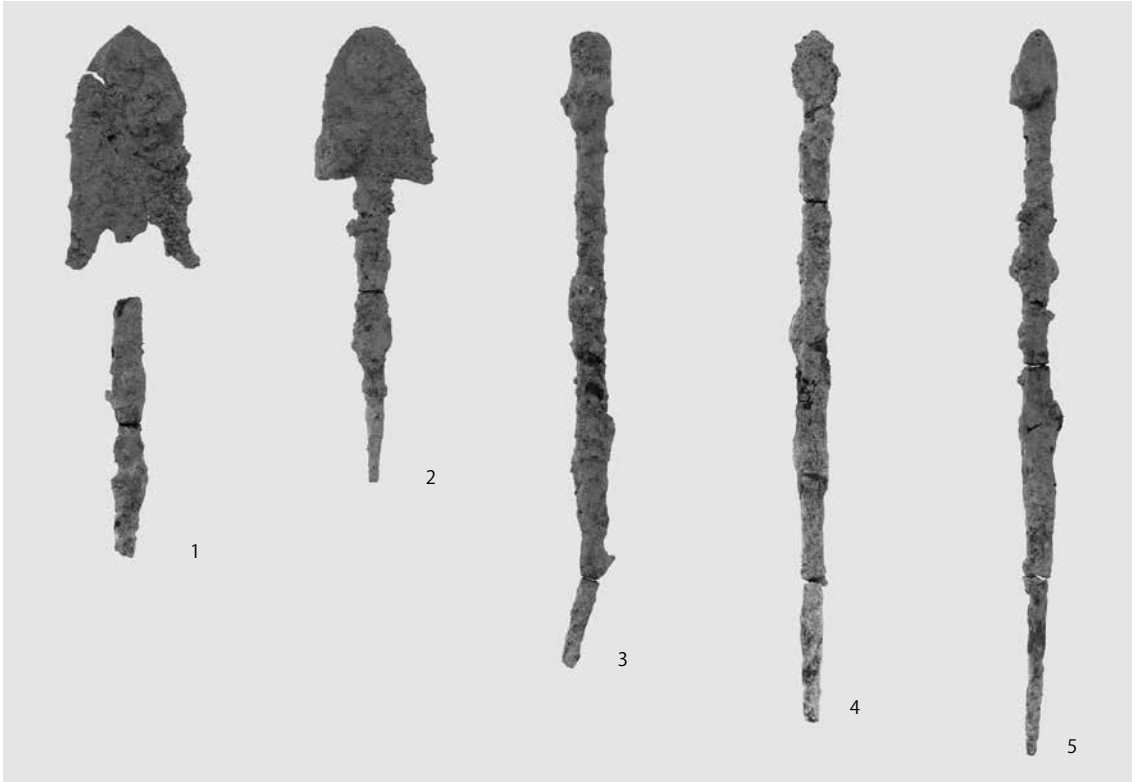
2 同東半（北から）



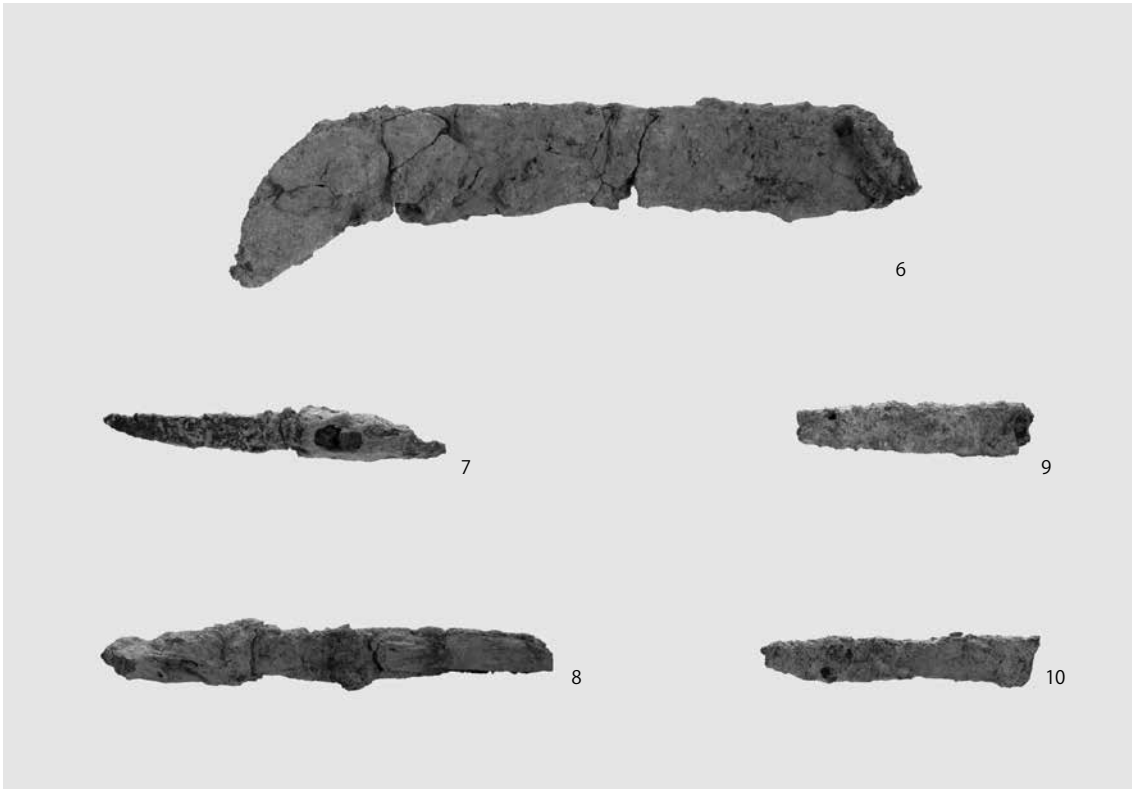
3 2号墳南埋葬墓坑埋土出土須恵器



4 同出土土師器



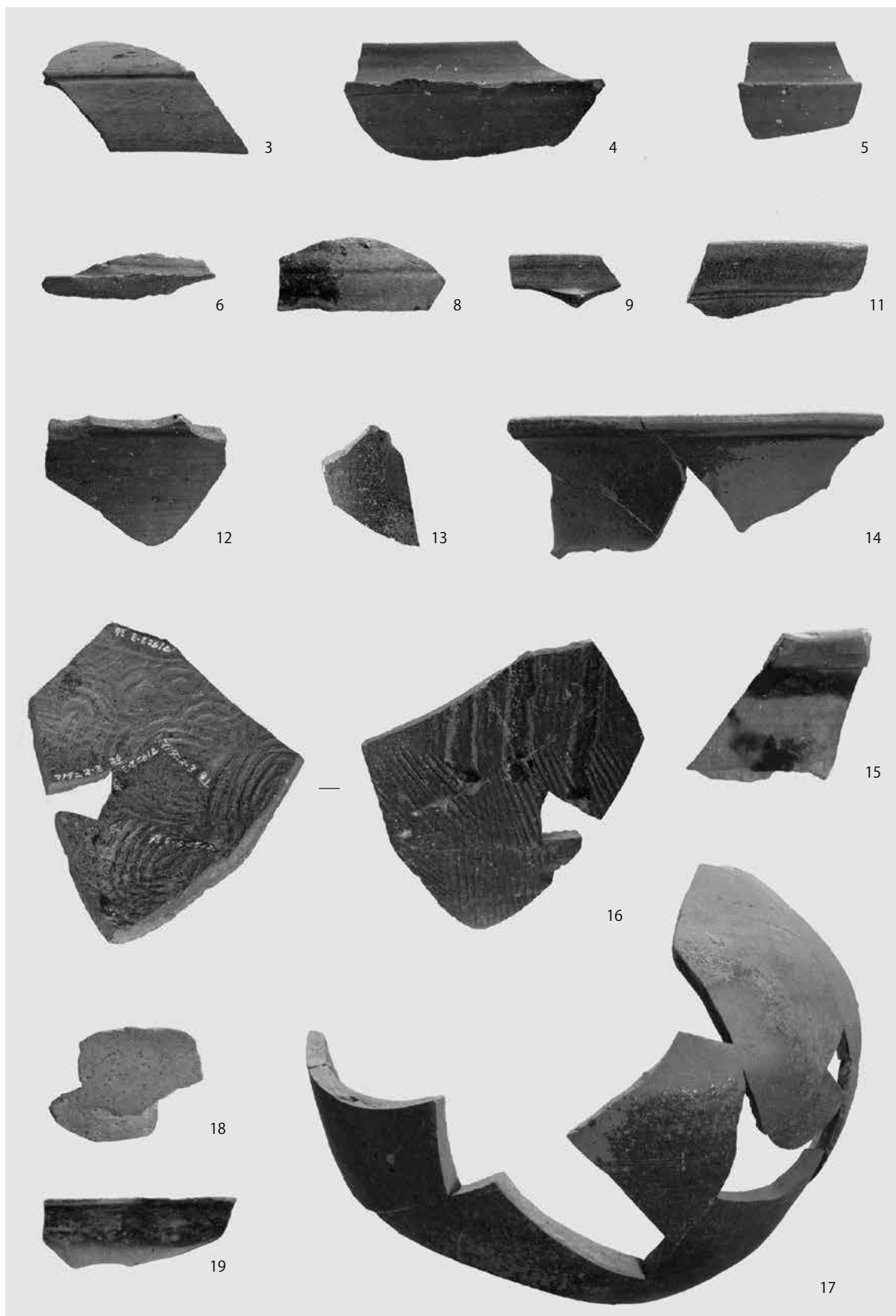
1 2号墳南埋葬出土鉄鏃



2 同出土農工具



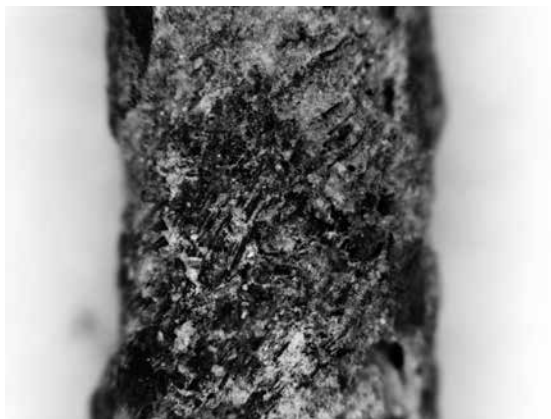
2号墳填丘出土土器（1）



2号墳墳丘出土土器（2）



1 2号墳填丘出土土器(3)



2 2号墳南埋葬出土鉄器3纖維質細部



3 同4口卷細部



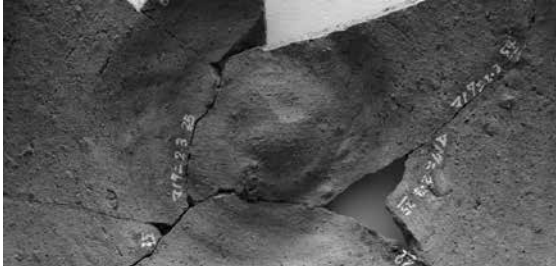
4 同5纖維質細部



5 2号墳填丘出土須恵器1口縁端部外面



1 2号墳墳丘出土須恵器1内面当て具痕



2 同2内面静止ナデ



3 同4外面ヘラ記号



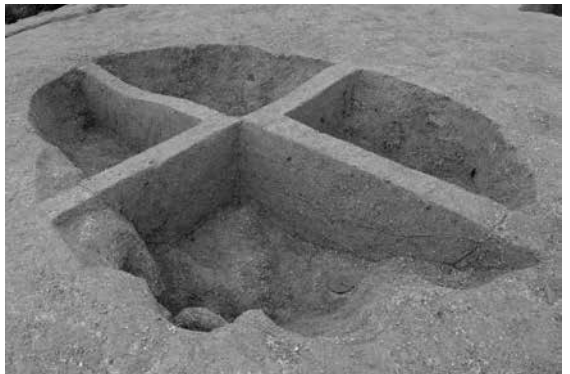
4 土坑1(東から)



5 同土層断面(東から)



6 土坑2(北から)



7 同土層断面(南東から)



8 土坑2出土土師器



1 3号墳掘削前（南から）



2 3号墳全景（南から）



1 3号墳周溝（北西から）



2 3号墳周溝内土層断面（東から）



1 3号墳埋葬施設（西から）



2 3号墳北埋葬（西から）



1 3号墳北埋葬（北から）



2 同横断土層断面（西から）



1 3号墳北埋葬縦断土層断面西半(南から)



2 同東半(北から)



3 3号墳北埋葬墓坑埋土遺物出土状況(東から)



4 3号墳北埋葬遺物出土状況(北西から)



5 同細部(北西から)



1 3号墳南埋葬（西から）



2 同（南から）



1 3号墳南埋葬横断土層断面（東から）



2 3号墳南埋葬縦断土層断面西半（南から）



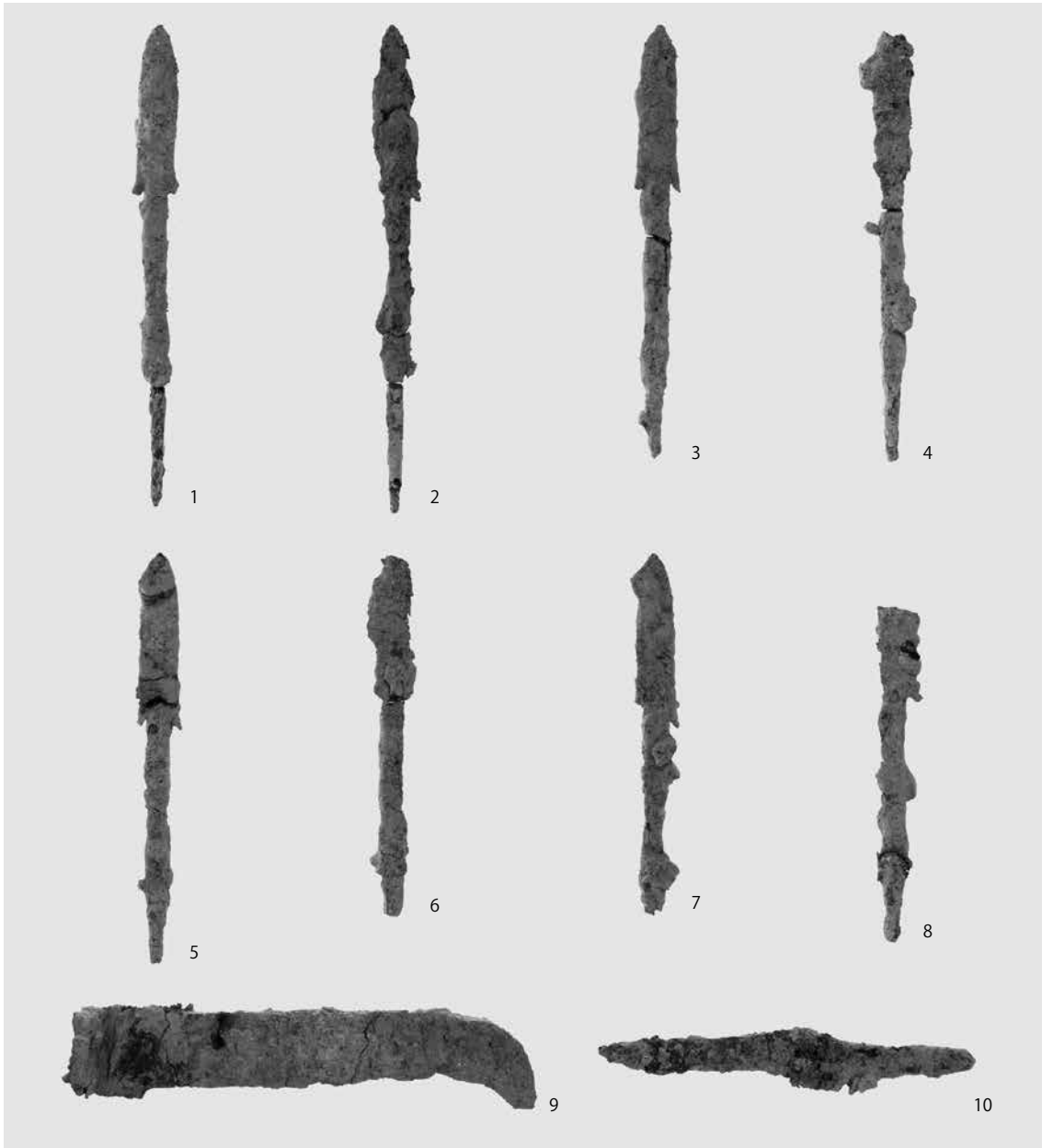
3 同東半（北から）



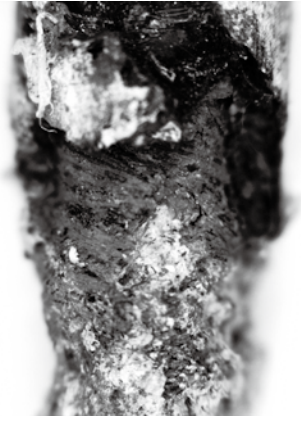
4 3号墳南埋葬遺物出土状況（南西から）



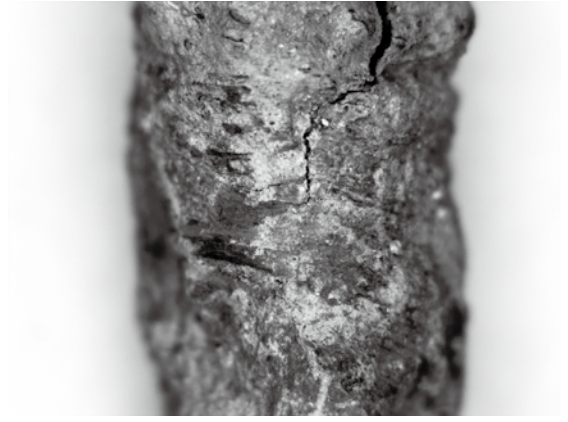
1 3号墳北埋葬墓坑埋土出土須恵器



2 3号墳北埋葬出土鉄器



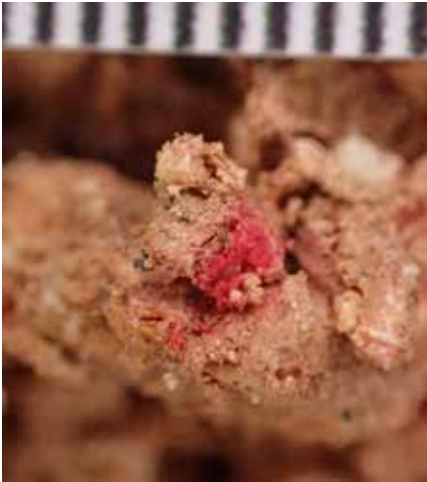
1 3号墳北埋葬出土鉄器2 繊維質細部



2 同3口巻細部



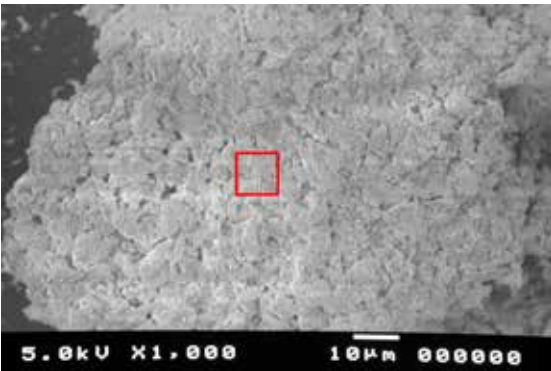
3 3号墳南埋葬出土鉄刀子



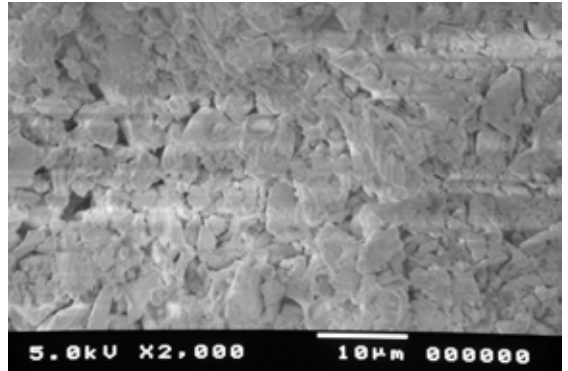
4 顔料の小塊（目盛間隔は0.5mm）



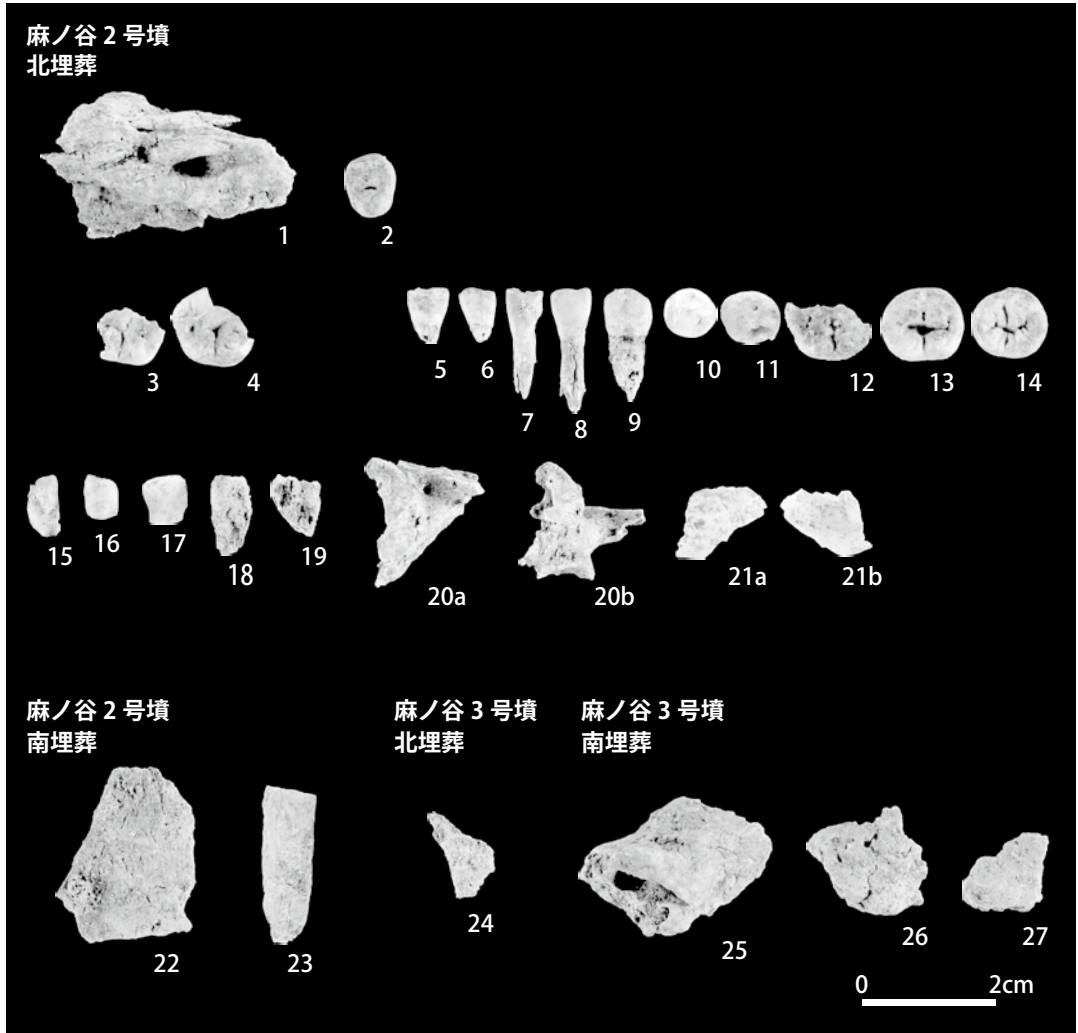
5 4の拡大



6 顔料のSEM画像（枠は元素分析範囲）



7 顔料のSEM画像（6中央拡大）



- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1. ヒト左側頭骨錐体部 (北埋葬棺内東半; No.116) | 2. ヒト右上顎第2小白歯 (北埋葬; No.116) |
| 3. ヒト右下顎第2大白歯 (北埋葬; No.116) | 4. ヒト右下顎第1大白歯 (北埋葬; No.116) |
| 5. ヒト右下顎第2切歯 (北埋葬; No.86) | 6. ヒト右下顎第1切歯 (北埋葬; No.86) |
| 7. ヒト左下顎第1切歯 (北埋葬; No.56) | 8. ヒト左下顎第2切歯 (北埋葬; No.56) |
| 9. ヒト左下顎犬歯 (北埋葬; No.86) | 10. ヒト左下顎第1小白歯 (北埋葬; No.113) |
| 11. ヒト左下顎第2小白歯 (北埋葬; No.116) | 12. ヒト左下顎第1大白歯 (北埋葬; No.116) |
| 13. ヒト左下顎第2大白歯 (北埋葬; No.116) | 14. ヒト左下顎第3大白歯 (北埋葬; No.116) |
| 15. ヒト歯牙 (北埋葬; No.86) | 16. ヒト歯牙 (北埋葬; No.113) |
| 17. ヒト歯牙 (北埋葬; No.116) | 18. ヒト歯牙 (北埋葬; No.86) |
| 19. ヒト歯牙 (北埋葬; No.116) | 20. ヒト第1頸椎 (北埋葬棺内東半; No.116) |
| 21. 腹足鋼殻 (北埋葬; No.113) | 22. ヒト? 不明 (南埋葬; No.70) |
| 23. 種類・部位不明 (南埋葬; No.64) | 24. ヒト? 不明 (北埋葬; No.98) |
| 25. ヒト右側頭骨 (南埋葬; No.80) | 26. ヒト? 頭蓋骨? (南埋葬; No.80) |
| 27. ヒト? 不明 (南埋葬; No.115) | |

麻ノ谷2・3号墳出土人骨

報告書抄録

ふりがな	まのたに2・3ごうふん							
書名	麻ノ谷2・3号墳							
副書名								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	金澤雄太・奥山誠義・金井慎司							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-2277 奈良県御所市室102番地 TEL 0745-60-1608							
発行年月日	2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
まのたに 麻ノ谷 2・3号墳	ごせし 御所市 大字戸毛	29208	17-C- 145・146	34°25' 40"	135°45' 30"	20150424 ～ 20150722	830	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
麻ノ谷 2・3号墳	古墳	古墳時代 後期	円墳2基 土坑2基		須恵器・土師器・瓦器・ 鉄鏃・鉄鎌・鉄刀子		4基からなる古墳群のうち、2号墳と3号墳を調査。墳丘上で各2基の木棺直葬を確認。	

奈良県御所市

麻ノ谷2・3号墳

御所市文化財調査報告書 第51集

平成28年(2016年)3月31日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市室102番地

印刷 株式会社 笹田印刷所

御所市今住16-3